

《翻訳》

ポルトガル大航海時代の裏面史『海難悲話』について（その2）
 ——「大ガレアン船サン・ジョアンの難船とマヌエル・デ・ソウザ・セプ
 ルヴェダの非業の死についての報告」訳註——

日埜 博司
 小磯 京子

訳者解題

『流通経済大学論集』通巻114号（1997年1月刊）に「ポルトガル大航海時代の裏面史『海難悲話』について（その1）——ディオゴ・ド・コウト「アギア号とガルサ号の航海記」解題と翻訳・註釈——」を掲載して以来ずいぶんと間隔が開いてしまったが、ようやくその続編を公にすることが出来る運びとなった。今回訳出する記録のフルタイトルを現代ポルトガル語の綴りで示せば次のようになる（図1参照）。

Relação da mui notável perda do galeão grande S. João em que se contam os grandes trabalhos e lastimosas cousas que aconteceram ao Capitão Manuel de Sousa Sepúlveda e o lamentável fim que ele e sua mulher e filhos, e toda a mais gente, houveram na Terra do Natal, onde se perderam a 24 de Junho de 1552.

中世ポルトガルの典籍が大方そうであるように非常に長いタイトルであるが、これをそのまま訳すと次のようになる。

「大ガレアン船サン・ジョアン号のいとも名高き難破についての報告。ここでは、カピタンのマヌエル・デ・ソウザ・セプールヴェダの身に降りかかった大いなる苦難と不憫な出来事の数々、そして彼とその妻子たち、その他すべての人々がテラ・ド・ナタール——彼らはこの地で1552年6月24日に難破した——で迎えた悲しむべき結末が語られる」（以下、本稿では「報告」と略称する）

15世紀初頭に開幕する大航海時代は、現代のポルトガル人にとってもその歴史的自負心をくすぐる懐古の対象である。ポルトガル人は16世紀の初頭から、隣国カスティーリャと競合しつつ海外雄飛を本格的に開始し、南北アメリカ大陸の他、アフリカ・アラビア・インド・東南アジア・中国、そしてついには彼らにとって極東に位置する日本にまでその足跡を延ばした。そして、当時の西欧に比べれば明らかに文化的爛熟度が高かった東アジア——特に明朝中国と室町

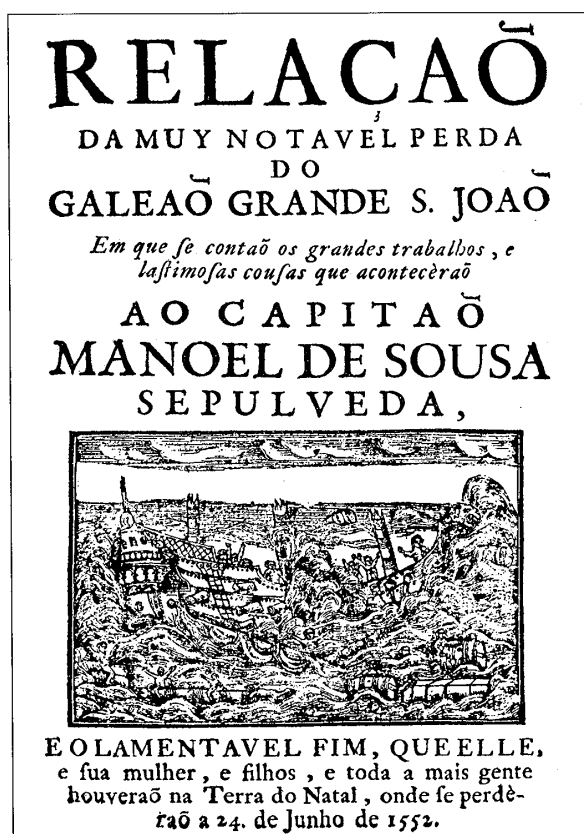


図1

期日本がそうである——との交渉を通じて、たとえカトリックの教えがそこに浸透していなくとも、それぞれ独自の法体系・価値基準・道徳感によって律せられる、高水準の“異”文化が存在することを、他のヨーロッパ諸国民に先駆け、実体験に即して認識するに至った。彼らは今もこの時代を誇りをこめて Descobrimientos と呼ぶ。

ポルトガル人が推進した“発見事業”の栄光を支えたものは、アラビアの先進技術を取り入れつつ自ら改良に改良を重ねた航海術である。彼らはガレアンあるいはナウと呼ばれる、千数百トンに達することも珍しくなかった大型帆船を駆って未知の海に乗り出した。16世紀初頭における海図製作術の進歩は目覚ましく、実地の航海によって季節風・浅瀬・陸影・海流等をめぐる実用的な情報も経験的に蓄積されてはいたものの、東洋の豊かな財貨を満載して本国に安着し、莫大な儲けを手にしうるか否かは、一にかかって“神の思し召し”次第であった。1562年1月付、ゴンサロ・ロイース神父 Pe. Gonçalo Roiz のミゲル・デ・トーレス神父 Pe. Miguel de Torres 宛、コーチン発の書翰（カステイリャ語）には《las naos que van a la India Dios las trae, Dios las lleva》（インディアへ向かう船は神が連れ来たり、神が連れゆき給う）という当時の俚諺が記録されている（cf. *Documentação para a História das Missões do Padroado Português do Oriente. Índia*, ed. Antonio da Silva Rego, IX, Lisboa, Fundação Oriente & Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses, 1995, p.14）。当然多くの海難事故が生じ——リスボンからインドに向かう往路航海での難船は比較的少なかった。乗船の手入れ不足や、安全性を無視した積荷の過剰積載など、主として人的要因に起因する難船はインドからリスボンへ戻る復路航海においてより頻繁に生じた——、それによって夥しい人命・財貨が失われた。

マヌエル・デ・ソウザ一行の遭難したアフリカ東南岸のテラ・ド・ナタール(Terra do Natal. 「聖誕祭の地」の意)の位置について少し記す。ナタールは現在、ダーバン Durban を中心都市とする南アフリカ共和国の一州名である。ナタールの名称は、インドへ向かっていたヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama が今日のダーバン港付近の断崖を望見した日こそ1497年の聖誕祭、すなわちポルトガル語の Natal であったことに因むという。ポルトガル人フェルナン・ヴァス・ドウラード Fernão Vaz Dourado の地図(1576年頃)には、沿岸部の一地名として *tera do natall* の小さな文字が見えるし、ラザロ・ルイス Lázaro Luís の地図(1563年)には、沿岸部の一地名としてのみならず周辺を総称する地名として *terra do natall* の大きな文字が見える(図2参照)。いずれにせよ南緯30度前後のアフリカ東南岸一帯を漠然と指す呼称であると言ってよい。

一行の遭難にも、復路における積荷の過剰積載という人的要因が絡んでいたように思われるが、テ

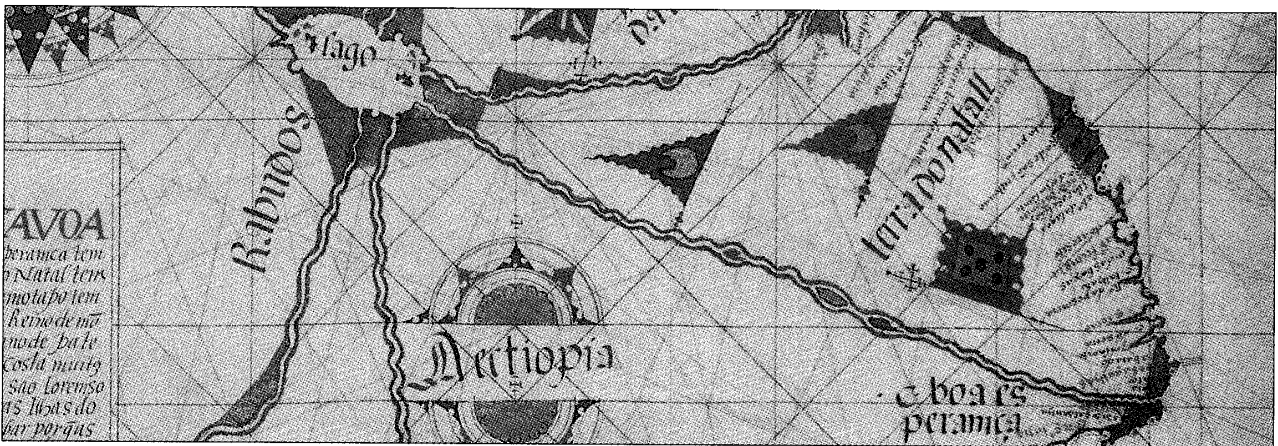


図2

ラ・ド・ナタール一帯の海域は、海の難所としても航海者たちに恐れられていた。たとえ沈没を免れ、最寄りの土地に上陸することが出来ても、しばしばポルトガル人に対して敵対的な原住民——彼らはバントゥー族に属し、ポルトガル人からはカフル人(cafres)と呼ばれた。16世紀の終わり頃日本の絵師によって描かれたいわゆる南蛮屏風に登場する黒人奴隷たちの多くは、アフリカ東南岸から攫われてきたこのカフル人である——による襲撃・略奪の危険や、ひどい飢え・渇きに怯えねばならない日常が待ち受けていた。難船という極限状況に追い込まれ、虚飾のヴェールを剥がされた生身の人間の本性や、遭難者の、時には英雄的で崇高な、時には野獣的で醜悪な行跡と言動とが、実際に事故に巻き込まれた人物によって、難船に関する印象・記憶が摩耗せぬうちに、あるいは書き留められあるいは語り伝えられた。今回訳す「報告」について言えば、アルヴァロ・フェルナンデスという生き残りのポルトガル人にモザンビークで逢った某が、彼から遭難の様子をつぶさに聴き取った上で、それを文学的香気の高い佳編に仕立て上げたのである。某は残念なことに氏名不詳であるが、その優れて洗練された文章に鑑みれば、相当高度な教養を具えた人物であったことに疑いはない。

この遭難事件が後世のポルトガル文学に与えたインスピレーションというが影響について、その実例をひとつだけ挙げる。すなわち、16世紀ポルトガル最高の国民詩人ルイス・デ・カモンイスの作品 *Os Lusíadas* 『ウズ・ルジアダス (ルシタニアの人びと)』の第V歌46～48には、マヌエル・デ・ソウザ夫妻の悲劇がほぼ史実に即して詠われているのである。カモンイスは、嵐が崎——ポルトガル人は“発見”当初の喜望峰をこう呼んだ——に棲むという伝説の怪物アダマストール Adamastor を『ウズ・ルジアダス』に登場させる。アダマストールは、ヴァスコ・ダ・ガマの一行に対し、嵐が崎を周航しようとする彼らの大胆不敵な企てをなじり、これまでに自らが滅ぼした著名な航海者たちの末路を縷々と語る。アダマストールの口を借り、カモンイスはマヌエル・デ・ソウザ夫妻の嘗めた悲運を次のように描く。

Outro também virá de honrada fama, / Liberal, cavaleiro, enamorado, / E consigo trará a formosa dama / Que Amor por grão mercê lhe terá dado. / Triste ventura e negro fado os chama / Neste terreno meu, que, duro e irado, / Os deixará dum cru naufrágio vivos, / Pera verem trabalhos excessivos.

Verão morrer com fome os filhos caros, / Em tanto amor gerados e nascidos; / Verão os cafres, ásperos e avaros, / Tirar à linda dama seus vestidos; / Os cristalinos membros e preclaros / À calma, ao frio, ao ar, verão despídos, / Depois de ter pisada, longamente, / Cos delicados pés a areia ardente.

E verão mais os olhos que escaparem / De tanto mal, de tanta desventura, / Os dois amantes míseros ficarem / Na fêrvida e implacável espessura. / Ali, depois que as pedras abrandarem / Com lágrimas de dor, de mágoa pura, / Abraçados, as almas soltarão / Da fermosa e misérrima prisão.

(Luís de Camões, *Os Lusíadas*, edição comentada, Rio de Janeiro, Biblioteca do Exército, 1980 の校訂に拠る)

「また来るだろう、令名あり、鷹揚で／女性に優しく、騎士の如き人〔註——マヌエル・デ・ソウザ自身〕が、／美しい婦人〔註——ドナ・レオノール〕を連れてくるだろう、／愛の神から頂戴し

たものじゃ。／悲惨な運命と黒い宿命が／ふたりをわしの領土に呼びよせる。／むごい難破に命拾いをさせても／厳しい苦業を嘗めさせたいからじゃ。

彼らは見るだろう、愛のうちに生まれ／育つたいとし子たちが飢えて死ぬのを。／非情で貪欲なカフル人たちが／美しい婦人から着物をはぐのを。／透きとおるよううるわしい手足が／暑さ・寒さ・風雨にさらされるのを、／やけつく砂地をいとかよわい足で／いつまでもいつまでも歩いたあげく。

そしてなおも見るだろう。たくさんの／災厄や不幸を逃れるまなこは／愛しあうあわれな二人が灼熱の／容赦もない森に取り残されるのを。／そこで石をも苦痛と絶望の／涙を注いで和らげたのちに／抱きあいつつ〔註——事実は今回の訳で述べられる通り、マヌエル・デ・ソウザは妻子を葬った後密林の中に入り消息を絶った〕、魂を美しくも／いと惨めな人屋から放つだろう。〕

(小林英夫 池上岑夫 岡村多希子訳『ウズ・ルジアダス(ルシタニアの人びと)』岩波書店、1978年。一部平仮名を漢字に変更した)

書物や放送で、ときおりポルトガル語の語彙がでたらめに表記・発音されるのを見聞きすると、この言葉を学ぶ私どもは、言い様のない厭な感じにとらわれる。なぜ一言大使館にでも尋ねる手間を惜しむのだろうと思ってしまう。それと同様に、特定分野の専門用語を訳す場合、たとえ門外漢には馴染みが薄くとも、専門家の間では常識化したタームを不適切に訳したり定訳を用いなかったりする愚は、素人といえども出来る限り犯したくないものである。

本「報告」には、16世紀ポルトガルの勢力圏で活躍した帆船の部所名、帆船航海をめぐる特殊な海事用語がかなり頻繁に現われる。この分野に関する専門知識を持たない訳者たちは、帆船の歴史に詳しい杉浦昭典氏(神戸商船大学名誉教授)にお教を乞うことにした。訳者の質問へ懇切丁寧な返信を賜った杉浦氏の学恩を、感謝の念とともに銘記する。訳文の作成に当たっても、海事用語が現われる箇所(英訳*)をお示しして訂正をお願いした。充分教示を咀嚼するよう努めたつもりではあるが、英訳の表現にはポルトガル語原文に照らす限り承服しかねるものもあり、結果として、杉浦氏に示していただいた訳文のままではない箇所が存する。このことをお詫びし、重ねて叱正を賜うことが出来れば大変嬉しい。

*) Charles David Ley (ed.), *Portuguese Voyages 1498-1663*, London, J.M. Dent & Sons Ltd & New York, E. P. Dutton & Co Inc, s/d., pp.240-259 に英訳が収められる。なお、Giulia Lanciani, *Tempeste e Naufragi sulla via delle Indie*, Roma, Bulzoni Editore, 1991, pp.145-168 には、『海難悲話』の研究者として令名の高いジウリア・ランチアーニ女史による「報告」のイタリア語訳が掲載される。また、Bernardo Gomes de Brito, *Storia tragico-marittima*, eds. Raffaella D'Intino & Antonio Tabucchi, Torino, Giulio Einaudi Editore, 1992, pp.3-26 に収められたイタリア語訳も参照のこと。

テラ・ド・ナタール沿岸部での座礁後、荒れる海から危険を冒して浜辺に辿り着き、辛くも一命を取り止めたマヌエル・デ・ソウザであるが、ポルトガル人の交易者がときおり姿を見せるようになっていたロウレンソ・マルケス(現、モザンビーク共和国の首都マプト)へ陸路を経由して到ろうとする彼の試みは、難渋を極める。食糧・飲料水の不足や、土地の不案内に加え、ポルトガル人に敵意を持つカフル人の襲撃・略奪に手を焼くうちに、最高司令官たるマヌエル・デ・ソウザその人の精神状態に異常が来し始める。現在地も特定出来ぬまま絶望的な行進を続け、供回りもやがて数えるばかりとなり、夫人のドナ・レオノールにもカフル人の略奪の手がついに及ぶ。着衣を脱ぐよう彼らに強

請され、当初こそ頑強に拒んでいた彼女であったが、ついには夫に説得されて一糸も纏わぬ裸体を黒人の前に曝す。彼女はそれを恥じるあまり自ら砂浜に掘った穴に閉じこもり、そこからは結局一步も外に出ることなく衰弱死を遂げる。それを見届けたマヌエル・デ・ソウザは独りジャングルに姿を消して消息を絶つ——。この「報告」で最も哀れを誘うクライマックスの場面である。

ところが、末尾の一節からは悲哀のトーンが消える。偽医師になりすまして黒人の王様に近づき、小便と泥を捏ね合わせた“薬”によって王様の皮膚病を“癒し”てやったパンタレアン・デ・サという人物のユーモラスな挿話が語られるのである。凄惨な全般的印象を与えるであろうこの作品へ、かすかな明るさとユーモアを添えようとする語り手と筆者の意図が感じられるかも知れない。

凡例

- 1 今回の翻訳は António Sérgio (ed.), *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito. Anotada, comentada e acompanhada de um estudo por António Sérgio*, I, Lisboa, Editorial Sul, 1955, pp.9-40 を底本とした。テキストおよび註に関して、Bernardo Gomes de Brito, *História Trágico-Marítima*, I, ed. Neves Águas, s/d., [Lisboa], Publicações Europa-América, pp. 25-43 も参照した。
- 2 ナウ(nau)は元来、ガレアン(galeão)と類似した大型帆船の形式を表わす呼び名であるが、「報告」には、単なる「船」の意味で用いられていることも多く、その際は「ナウ」という音訳は用いず、単にサン・ジョアン号そのものを指すべく「船」という訳語を当てておく。
- 3 ガレアン船の部所名については、アントニオ・セルジオによる校訂本 Sérgio (ed.), *op. cit.*, pp. 260-261 の挿画を68～69頁に掲げて原語および訳語を示す。すべての訳語について杉浦氏の教示を受けた。また『船と航海』（ビジュアルディクショナリー3、同朋舎出版、1993年）とそのポルトガル語版 *Dicionário Visual dos Navios e Navegação*, Lisboa, Verbo, s/d. も参照した。
- 4 この「報告」には高級船員の職名が三つ (mestre メストレ, contra-mestre コントラメストレ, guardião グアルディアン) 頻繁に現われる。それぞれの職掌について、まずセルジオの註を引用する。

すなわち、まず mestre は、船内における索具と帆一式を管理する責任を負い、操船要員の中では最も地位が高い人物である。地位において piloto に次ぎ^{*}、あらゆる水夫や見習い水夫、その他の船員すべてに対する命令権を有し、直属の下僚として自らを補佐する contra-mestre を持っていた。船尾から大櫓までの範囲を管掌し、帆の上げ下ろしやその他すべての必要な用務を仕切った。mestre に次ぐのは contra-mestre であるが、彼の任務は、船首から前櫓までの面倒を見ることであった。mestre もしくは contra-mestre いずれかひとりが昼夜交替で自らの持ち場に留まることになっていた。甲板上、大櫓と前櫓との間は、見習い水夫たちが寝泊まりする場所であったが、この指揮権を有するのが contra-mestre の下に直属する操船要員であった guardião である (Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.23, nota)。

*) 杉浦氏の私信によれば、piloto はその航路に詳しい者が特別に雇われるのが普通であり、mestre 以下の操船要員とは職掌系統を異にする。それゆえ piloto と mestre との間に上下関係は存在しないはずである。ただし航海に熟達しているとは限らぬカピタンに代わって、piloto が mestre なり contra-mestre なりに針路を指示することはあったであろう。

日笠は、上記の語彙の訳語を定めるに当たり、16世紀後期のゴアを中心とするポルトガル領インドニアに関する詳しい観察を残したオランダ人リンスホーテン『東方案内記』の訳書（岩生成一他訳註、岩波書店、大航海時代叢書Ⅷ、1968年）に見える用語に従うことの是非についても、

杉浦氏にお尋ねした。

まず, mestre に当たるオランダ語の語彙を『東方案内記』の訳者は「操舵長」と訳すのだが, 杉浦氏はこの訳語を承認せず「船長」の訳語を当てる。mestre の職分は, 「上甲板最後部の右側に二つ, もしくは三つの居室を持ち, 下へは決して降りず, もっぱら帆の上げ下ろしや針路をどの方向へ取るべきかを船長に指令し, またその統率ぶりを監視すると同時に, 日々太陽の高度を測定して船の位置, 針路を記録し, その日その日の風向き, 天候のぐあいを書き留める」(前掲書, 639 頁) ことであった。その下に位するのが contra-mestre すなわち『東方案内記』の訳者によれば「水夫長」であるが, 杉浦氏はこれを「副船長」または「航海士」と呼ぶ。contra-mestre は「前甲板に居室を持ち, 前檣ならびに前檣帆を受け持ち, 「前檣に関するすべてのことと, それから錨をしっかりと縛りつけておくよう監督する」(同上) ことに責任を負った。guardião は『東方案内記』の訳者によれば「甲板長」であり, 「大檣のすぐ近く, その左側に居室を持ち, 「見習船員らを駆使して船内の排水, 清掃から綱具の運搬, 取付け, ボートの管理などを掌握する」(同上) ことを担当した。杉浦氏はこの訳語には異議を唱えていない。

見られるように, 上記 3 種の高級船員の職掌に関するアントニオ・セルジオの註はリンスホーテンの記述とほぼ一致しているのだが, 杉浦氏は, 前 2 者の職名に関する限りリンスホーテンの訳書で与えられている訳語には信頼が置けないとする。

- 5 船内の序列においてカピタンに次ぐ piloto は現代の「水先人」のことである。訳者は「按針」の訳語を当ててきたが, これには和船のイメージが纏いついており好ましくない。杉浦氏はこれに「航海長」の訳語を当てる。船隊の最高指揮官たる capitão は「甲比丹」等と漢字表記され日本語としても理解可能な語彙であるので, これを音訳した「カピタン」をそのまま用いる。杉浦氏は capitão については「船隊長」または「隊長」の訳語を示して下さった。

今回は熟慮の末, 暫定的な措置として, 前 3 者の職名に関しては, それぞれに訳語を与えることをやめ, これらの原語を片仮名表記し, その代わりとして, それぞれの職掌の内容だけを上に明らかにするに止めた。後 2 者についても, 表記上の統一という単純な理由により, それぞれを音訳した「ピロット」および「カピタン」の言葉を当てる。

- 6 初出の人名・地名の原語は () に入れることなくその現代式綴りを示した。
- 7 ポルトガル語で ou の発音は「オー」という長音で仮名表記するのがより適切なのであるが, アクセントの置かれた o を長音または撥音で仮名表記する場合と区別するため, 敢えてこれを「オウ」と仮名表記する。

翻訳

大ガレアン船サン・ジョアン号のいとも名高き難破についての報告。ここでは, カピタンのマヌエル・デ・ソウザ・セプールヴェダの身に降りかかった苦難と不憫な出来事の数々, そして彼とその妻子たち, その他すべての人々がテラ・ド・ナタール——彼らはこの地で 1552 年 6 月 24 日に難破した——で迎えた悲しむべき結末が語られる

序章

この難船の物語の中で語られることには, 次のような狙いがある。すなわち, 神に対する畏怖の念を眼前に現出せしめて, 人々が神を大いに恐れ, かつ良きキリスト者となるよう教え, さらに彼らが神の戒律を破らぬよう導くことである。マヌエル・デ・ソウザ Manuel de Sousa¹⁾は気高いフィダルゴ²⁾でありかつ優れた騎士であって, インディアではその在任期間中, 多くの人々に食を与え, また多

くの人々へ善行を施しつつ、5万クルザード以上を散財した。にもかかわらず、彼は最後には、ただならぬ悲惨と窮乏のうちに、カフル人(cafres)のただ中で、食べるもの飲むもの、果ては着るものにさえ事欠いて、その一生を終えた。妻子たちも同じ運命を辿った。彼が亡くなるまでに嘗めた苦難の数々は枚挙に遑なく、その様は、彼とその苦難を分かち合った人でなければ、到底信じかねるほどである。そのような者たちの中に、ガレアン船のグアルディアンであったアルヴァロ・フェルナンデス Álvaro Fernandes という人物がいた。彼はその難船の模様をたいそう詳しく私に話してくれた。彼には1554年ここモサンビーケ Moçambique で偶然に出逢ったのである。

私がこのフィダルゴとその一行の苦難および死について書き綴ったのは、この難船の話があらゆる人々に訓戒を与え、かつ良き模範を示すであろうと思われたからであり、そうすることによって、海を旅する者たちが絶えず神と聖母とに一身を委ねるよう促したいと考えたのである。願わくば読者よ、この難船で非業の死を遂げた者どもすべてのために祈られんことを。アーメン。



図3

1) フルネームはマヌエル・デ・ソウザ・セプールヴェダ Manuel de Sousa Sepúlveda。1500年から1505年の間に生まれインドに向かったのは1528年。インド各地で勇猛な指揮官として戦役に従った。この物語のもうひとりの主人公ドナ・レオノール D. Leonor は、第一五代インド総督ガルシア・デ・サ Garcia de Sá の娘のひとり。彼女とはインドで1548年に結婚している(cf. *Grande Enciclopédia Luso-Brasileira*, XXVIII, Lisboa & Rio de Janeiro, Editorial Enciclopédia, pp.358-359)。1552年2月3日インドを発った後、消息を絶つまでの経緯は本「報告」に詳しい。

2) 原綴り fidalgo。「貴族」を意味するが、単に平民と異なることを強調するために頻繁に使われる語彙でもある。

1552年2月3日³⁾、このガレアン船でマヌエル・デ・ソウザは——ああ神よ、彼を赦し給え——あの不運の航海に乗り出すべくコシン Cochim〔コーチン〕を旅立った。その出発はあまりにも遅れたが、それはコウラン Coullão〔クイロン〕へ荷物を積みに行ったため、そしてそちらに極めて僅かな胡椒しかなかったためである。コウランではおよそ4500⁴⁾を積み込み、コシンに戻って大量7500⁴⁾を積み込み終えたが、これには大きな難儀が伴った。それはその頃マラヴァール Malavar⁵⁾〔マラバル〕で起こっていた戦争のせいであった。この積荷と共に本国へ向けて出発したから、積載量は総計1万2000⁴⁾であったはずである。この船に積まれる胡椒はごく僅かであったけれども、だからこ他の商品をたっぷり積み重ねるにはゆかなかった。とびきり多くの積荷を積んだ船が冒す危険の大きさに十分な配慮を払うことが、ここでは必要であった。

3) 2月に入ってインドを出航するのはかなりの遅れと見てよい。インド洋ではモンサン monção と呼ばれる季節風が10月から翌年3月の間、北東から南西の方向に吹く(北東季節風)。これと反対のモンサンは4月から9月の間に吹く(南西季節風)。インドを出帆するのはもちろん、北東季節風の時期であり、10月から翌年3月までは一応出航が可能であったが、実際には12月を過ぎてインドを出帆した場合、喜望峰を望見する地点に達するのは、ちょうど

この海域に寒さが募り、海が荒れる時期と重なることになる。サン・ジョアン号を襲った嵐もこの時期の天候悪化によるものであろう。逆に、インドへ向けてリスボンを出帆する時期は、アフリカ東海岸で南西季節風を捉えることが出来るよう調整されたから、サン・ジョアン号のように、インドで香辛料その他の財貨の積み込みに手間取る事態が生ずると、かの地の出帆が2月あるいは3月にずれ込むこともあった(cf. Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.16, nota)。

4) 古い重量単位であるキントル quintal もしくは quintalada のそれぞれ複数形が省かれていると推定される(cf. Bernardo Gomes de Brito, *História Trágico-Marítima*, I, ed. Neves Águas, s/d., [Lisboa], Publicações Europa-América, p.26, nota 1)。とすれば1キントルは4アローバ(quatro arrobas), すなわち58.758kgである(Aurélio Buarque de Holanda Ferreira, *Novo Dicionário da Língua Portuguesa*, segunda edição revista e aumentada, Rio de Janeiro, Editora Nova Fronteira, 1986)から、1万2000キントルは34万5096kgとなる。この数値に関しては疑義を残しておく。

5) インド亜大陸西岸地方の南半分, つまり北緯12度付近からインド亜大陸最南端のコモリン岬までの海岸地方。

4月13日、マヌエル・デ・ソウザは、南緯32度の位置においてコスタ・ド・カーボ⁶⁾を望見するに至った。彼らは内寄りの針路を採りすぎていた。インディアを出発してから多くの日数が経過していた上、カーボ⁷⁾を望見する時期に遅れが出ていたためである。これには備えていた帆の劣悪さが関わっていた。上のことこそ、彼らの破滅の幾つかの理由のひとつ、しかし主要な理由であった。ピロットのアンドゥレ・ヴァス Andre Vaz がアグーリャス岬⁸⁾の陸地に向けて針路を取っていたところ、カピタンのマヌエル・デ・ソウザは彼に懇願して、最も近い陸地を望見しうる所へ向かって欲しいと言った。ピロットはカピタンの意を迎えるため、言われた通りにした。それゆえにテラ・ド・ナタールが視界に入ってきた。その土地を望みつつある時、軟風(vento bonança)が吹いてきたので、測鉛(prumo)を手にして水深を測りつつ、アグーリャス岬が見えてくるまで沿岸部を航行した。風の様子は、ある日は東から吹くと思えば別の日は西から吹くという具合であった。溯ってすでに3月11日、船はカーボに対し東北・南西を結ぶ線上にあり⁹⁾、その沖合25レグアの地点を走っていた。その時、西あるいは西北西からの風が船を襲い幾度も稲妻が閃いた。夜の帳が下りる頃であったので、カピタンはメストレとピロットを呼び、船首に逆風を受けているというこの天候状態にどう対処すべきであるか、と質問した。ふたりはとりあえず針路を変更して悪天候をやり過ぎ¹⁰⁾のが良き分別である、と答えた。

6) 原綴り Costa do Cabo. 「岬の海岸」の意で、アフリカ最南部一帯の沿岸地方を指すか。

7) 原綴り Cabo. ポルトガル語でカーボ・デ・ボア・エスペランサ Cabo de Boa Esperança すなわち喜望峰。

8) 原綴り Cabo das Agulhas. 「針の岬」の意。現在の Cape Agulhas すなわちアガラス岬。喜望峰の南東にありアフリカ大陸最南端。

9) セルジオは「東北・南西」は「北西・南東」の誤りではないかと述べる。もしも喜望峰を東北・南西を結ぶ線上で望見したのであれば、すでに喜望峰の迂回を果たしていたことになるから、というのが彼の言い分である(Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.17, nota)。

10) 原綴り arribar. *História Trágico-Marítima* 所収の諸記録に頻出する動詞であるが、セルジオによれば、この動詞には次の三つの意味がある(*ibid.*, nota)。①船首を風の吹いてくる方向から遠ざけるように船を操る(manobrar de forma a afastar a proa do navio da linha do vento)。②出発港に引き返すか、航路外にある港を捜し求める(tornar ao porto de partida ou demandar outro fora da linha de derrota)。③悪天候のゆえにこれまでとってきた針路から船を逸らせる(desviar do rumo seguido, devido ao tempo)。

ふたりが緊急避難するに如くはなしと述べた理由は、次の通りであった。本船はたいそう船体が大きくしかも極めて長大である。荷の箱や商品を夥しく積んでおり、しかもヤードに装着している帆の他に予備の帆は備えてはおらず、その他の艤装具¹¹⁾も、赤道(Linha)付近で襲ってきた暴風のために攪わられている。現有の帆さえ腐食がひどく頼りになる代物ではない。もしこのまま無為に海上を漂ううちに天候が荒れ、いよいよ緊急避難が差し迫れば、吹き募る風のために現有の帆は楽々と攪われるであろう。こうなれば船内に予備の帆はないのであるから、航海を続け一命を取り留めるための大打撃となる。ヤードに装着されている帆がこのような代物であったため、帆を補修するために注いだ時間

は、船を走らせるに費やしたそれとほとんど同じであった。実際、この期に及んでなおカーボを迂回出来なかった要因のひとつは、帆をヤードから外してこれを縫い合わせる作業に時間を潰したことにある。したがって、彼らにとって良き判断と思われたのは、フォアマストとメインマストのそれぞれ低い方の帆双方を用いて¹²⁾岸に向かって進むことであった。なぜなら、フォアスル¹³⁾だけを用いたとすれば、それは古びてぼろぼろであり、船体の非常な重みのゆえに、風が吹けばヤードからその帆が攫われるのは必定だったからである。ところが両檣の大帆が一緒に使われていれば、ひとつが他のひとつを補い合う機能を果たすであろう。風に押し戻された結果、カーボから130レグアは隔たっているであろう地点でこうして緊急避難に向かおうとしていた時、風向きが変わり北東風、さらには東北東風が吹いた。この風は猛烈で、船は再び南へ、また南西へと押し戻された。西方から湧き立つ大波、東方から襲う高波を受けて、ガレアン船はすっぽりと波間に隠れ、大揺れの起こ



図4

るたびに、今にも海底深く呑み込まれてしまうかと思われた。このようにして3日が経過し、その3日目も暮れようとする頃、風は再び和らいだ。しかし依然として海はかなり時化しており、船の揺れも相変わらずであった。その結果ついに3本の舵針〔舵軸〕¹⁴⁾が失われてしまった。船が遭難するも無事に航行するも、ひとえにこれ次第なのである。この事実は誰にも洩れなかったが、ただ独り船大工だけが舵の見廻りに行った後、問題の金具に欠損があることに気付いた。そこで彼はメストレのもとへやって来て、密かにそのことを告げた。連絡を受けたメストレは、クリストーヴァン・フェルナンデス・ダ・クーニャ Cristóvão Fernandes de Cunha という人物で“ちんちくりん” O Curto の綽名で呼ばれていたが、有能な士官でしかも気の利いた男であったから、このこと、カピタンにも他の誰にも言うな、連中が恐れおののくといけないから、と答え、船大工はその通りにした。

11) 原語の *equipação* は *esquipação* とも綴る。セルジオによれば、一隻の船が必要とする一連の機装品。ここでは特に帆に用いる帆布類を指す。原則として当時の帆船はこうした帆布類を二揃え積んでおり、一揃えは帆桁に装着して実際に使い、もう一揃えは船倉にしまわれていた (Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.17, nota)。

12) 原文 *com os papafigos grandes ambos baixos*. すなわち「前檣大帆〔フォアスル〕と大檣大帆〔メインスル〕の双方を用いて」の意。この箇所解釈については、セルジオに従う (cf. *ibid.*, nota)。英訳者はこの箇所を *with the two foremast sails half-furled* (David Ley [ed.], *op. cit.*, p.241), すなわち「前檣の帆2枚、つまり前檣大帆〔フォアスル〕と前檣上檣帆〔フォア・トップスル〕をそれぞれ半ば巻き上げて」と訳しているが、形容詞としての *baixos* が *half-furled* に対応する意味を持つとは思われない。単純に「低い位置にある」の意味に解すべきであろう。なお *papafigos* の意味からしても拙訳のようにしかならないと思う。

13) 原語の *vela de proa* は「船首の帆」と直訳出来るが、このような荒天中に船首斜檣帆を使うことはあり得ない。ここでは前檣帆〔フォアスル〕を指す(杉浦氏の教示による)。

14) 原語 *machos-de-leme*. *machos* とは「牡」の意。*fêmeas* はその反対語で「牝」の意。「舵針」および「壺金」という訳語は、杉浦氏の教示による。レイタンとロベスの『古・現代海事用語辞典』の定義は次の通り。*Ferragens ligadas a madre do leme e cujos espigões vão enfiar em outras peças denominadas «fêmeas» fixadas no cadaste. Com tal*

sistema, o leme pode girar para um e outro bordo. 「舵の本体に接続するもろもろの金具のこと。そのぎざぎざが船尾材に固定される《牝》と呼ばれる別の船具に嵌め込まれる。この装置によって舵は左右に回転することが出来る」(Comandante Humberto Leitão & J. Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, terceira edição, Lisboa, Centro de Estudos Históricos e Cartografia Antiga, 1990, p.334)。

なお、『海難悲話』初版本には machos-do-leme に続いて so-os polegar という語句が見えるが、セルジオは自らの校訂本からはこの語句を省いている。別の校訂者であるアグアス・ネヴェスもこれを「理解不能の表現」と断わった上でその真意を推定している (cf. Gomes de Brito, *op. cit.*, ed. Águas Neves, p.27, nota 3)。

このような困難な状況の中で航行を続けていると、再度、風が東南東から吹き、物凄い嵐が湧き起こった。一同が後に辿る運命を、神はすでにこの時嘉し給うていたかのようであった。とりあえず手持ちの帆に頼り、再び緊急避難を試みようとして陸の方向へ舵を切ったところ、この舵がどうしても利かず、船首が完全に風上へ向いてしまった¹⁵⁾。激しい風のために、メインヤード(verga grande)からメインスル(papafigo)が攫われた。メインスルがもぎ取られ、かつ予備の帆はない以上、彼らはフォアスルから風を抜いてこれを取り込もうと¹⁶⁾目の色を変えて殺到した。帆をすべて攫われるくらいなら、敢えて波を斜めから受けつつ帆なしで海に漂っている方がまだましであると思われたのだ¹⁷⁾。こうして船が横からの波を受けている時¹⁸⁾、フォアスル(traquete de proa)の取り込みは依然終わっていなかった。さらに横からの波を受けている最中に、非常な大波が3度船を襲った。それは甚だしい大波であり、船はその衝撃で大揺れに揺れ、左舷(bombordo)側の索具とシュラウズ¹⁹⁾とが破損し、残るは、僅かに船首寄りの3本の前方支持索〔ステイ〕(três [costeiras] dianteiras)だけとなった。

15) 原文 toda se pôs de ló. セルジオによれば、pôr-se de ló (不定詞) は orçar と同義で、aproximar a proa da linha do vento すなわち「船首を風上方向に向ける」の意 (Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.18, nota)。レイタンとロペスによれば、ló は o lado do navio donde sopra o vento と定義されて「風の吹いてくる方の舷側」すなわち「風上舷」の意 (Leitão & Lopes, *op. cit.*, p.328)。

16) 原文 a tomar a vela de proa. セルジオによれば、tomar a vela は subtrair a vela à acção do vento すなわち「帆を風の力から解放してやる」の意 (Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.18, nota)。

17) この箇所の原文は se quiseram antes aventurar a ficar de mar em través que ficarem sem nenhuma vela. 下線部の表現は前掲の『古・現代海軍用語辞典』の説明に従う (cf. Leitão & Lopes, *op. cit.*, p.517)。

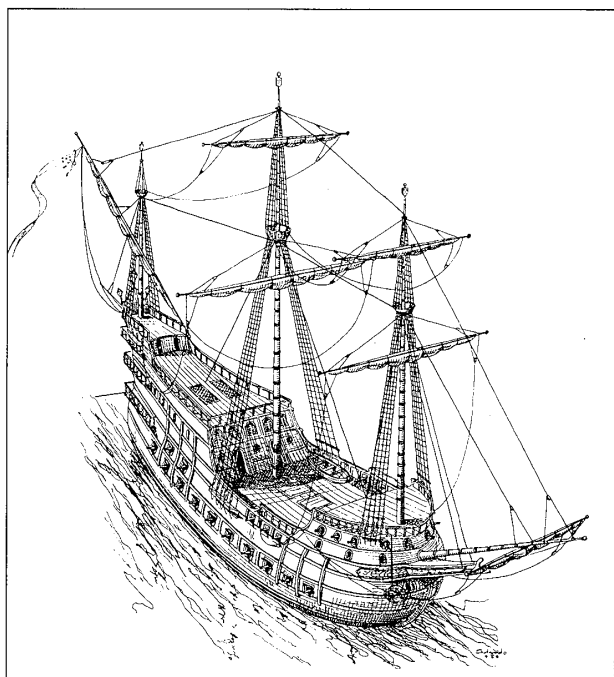


図 5

18) 原文 quando se a nau atravessou. 不定詞の atravessar-se は英語で「ジグザグ航路」や「間切り走り」を意味する traverse の動詞形に当たるが、ここでは本文のように訳す。「帆なしでは、また、帆の取り込み中には間切り走りは出来ません。あるいは取り込み中の帆に風が入ったり抜けたりして『一進一退』の状態になったということかも知れません」(杉浦氏の私信による)。

19) 原語 costeiras. この語彙は cabos que reforçavam as enxárcias つまり「enxárciasを補強するロープ」のこと (Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.18, nota)。enxárcias とは conjunto de cabos (ovéns) que aguentam os mastros e mastareus para a borda つまり「船縁に繋いでマストを支える一連のロープ[大索]」の意 (*ibid.*, p.19, nota)。

左舷側の索具(aparelhos)が損壊し、そちら側のマストからは横静索(enxárcias)が失われてしまったので、船員たちは後方支持索〔バックステイ〕²⁰⁾を作るために大索〔ホーザー〕²¹⁾を持ち出し

た。このような作業に手を取られている間も海は大荒れであり、今更こんなことは無益である、これほどにも船が翻弄されている以上、思い切ってマストを切り倒してしまうのが正しい選択なのではないか、と思われた。風も波も極めて猛烈であり、ためにいかなる作業も行なうことは出来ず、そもそも直立してられる者さえなかった。

20) 原語 *brandais*. セルジオによると *cabos que aguentam os mastaréis para a borda e um pouco para ré* つまり「船縁に向けて、やや船尾寄りにマストを支える方の両舷側に張った綱」(Sérgio [ed.], *op. cit.*, p.18, nota)。

21) 原語 *viradores*. セルジオによると *cabos solteiros de grande vitola* つまり「極めて太い“独身”ロープ」。“独身”とはいかなる索具とも連結していないという意味 (*ibid.*, nota)。

手に手に斧を持って今まさに切り始めようとした時、メインマストが檣冠の上方でぽっきりと折れてしまうのが見えた²²⁾。まるで一撃のもとに切り倒されたかのようにであった。右舷(*estibordo*)側から、風がメインマストのトップ〔メイントップ〕(*gávea*)や横静索(*enxárcias*)をたちまち海へ攫っていった。至極軽いものでも運ばれてゆくようであった。そこで彼らは、反対側の舷側の索具やら横静索やらを切り放つと、すべてが一塊になって海に消えた。こうしてマストもヤードも失われたのであるが、彼らは諦めずに、上方が折れてしまったメインマスト(*mastro grande*)の根元に応急のマスト(*mastaréu*)を拵えた。すなわち、この応急のマストにヤードの破片をしっかりと釘で打ちつけ、出来る限り強力な補強材〔ウェッジか〕(*arreataduras*)をあてがったのである。次に、補助帆(*vela da guia*)のためのヤードがしつらえられた。別のヤードの破片からパパフィゴ²³⁾用のヤードを拵えた上、古くなってしまった帆の切れ端を幾つか繋いでこれを主帆桁〔メインヤード〕(*esta verga grande*)に装着した。フォアマストに対しても同じ処置が施された。こうしてマストにせよヤードにせよ帆にせよ、極力応急処置は施してはみたものの、頼りになるものでは到底なく、そよとでも風が吹こうものなら、丸ごと攫われかねぬ代物ばかりであった。

22) 原語 *Estando com os machados nas mãos começando já a cortar, vêem subitamente arrebentar o mastro grande por cima das polés das coroas, (.....)*. この場合の檣冠は下檣の頂部にあり、大帆桁を吊り上げるためのものかも知れない(杉浦氏の私信による)。

23) 原綴り *papafigo*. レイタンとロベスはこの語彙を次のように定義する。Qualquer das velas, a 《grande》 e a do 《traquete》, dos navios redondos, que são as primeiras a contar de baixo, respectivamente, no mastro grande e no do traquete. すなわち「フォアマストもしくはメインマストに装着された下から数えて最初の帆」(cf. Leitão & Lopes, *op. cit.*, p.392)。したがってフォアスル(前檣大帆)またはメインスル(大檣大帆)のいずれか。文脈からはメインスルとなる。

こうしてすべてに火急の処置を施した上で、一行は南南東の風に帆を孕ませた。舵の部分からは、すでに述べたように三つのしかも主要な金具(*ferros*)〔前出の舵の金具〕が欠落していたので、舵取りは多大の苦勞なしには行なえなかった。この頃にはシート〔帆脚索〕が舵の役割を果たしていた²⁴⁾。そうこうしながら進んでゆくと、風が次第に強まってきて、船は風上に向かい、ついには船首が完全に風上を向いてしまい、もはや舵によってもシートによっても操船は不可能となった。今度はメインスルと、補助帆の役割を果たしていた帆が風に攫われるに至った²⁵⁾。またまた帆を失ったので、フォアスルのもとに駆けつけた²⁶⁾。とその時、船は横からの波を受け傾ぎ始めた²⁷⁾。ぼろぼろであった舵は、その時襲った大波のため真っおたつに割れてしまい、ただちにその半分が波に攫われたが、舵針(*machos*)はすべて壺金(*fêmeas*)に挿入されたままであった²⁸⁾。ここからも判るように、このインド航路において誰しもが体験する幾多の苦難に思いを馳せれば、船の舵や帆には幾ら配慮をしてもしすぎることはないのだ。

24) 原文 *já então as escotas lhe serviam de leme*. 原文の直訳であるが、「舵はたぶん船尾にぶら下がっている程度で

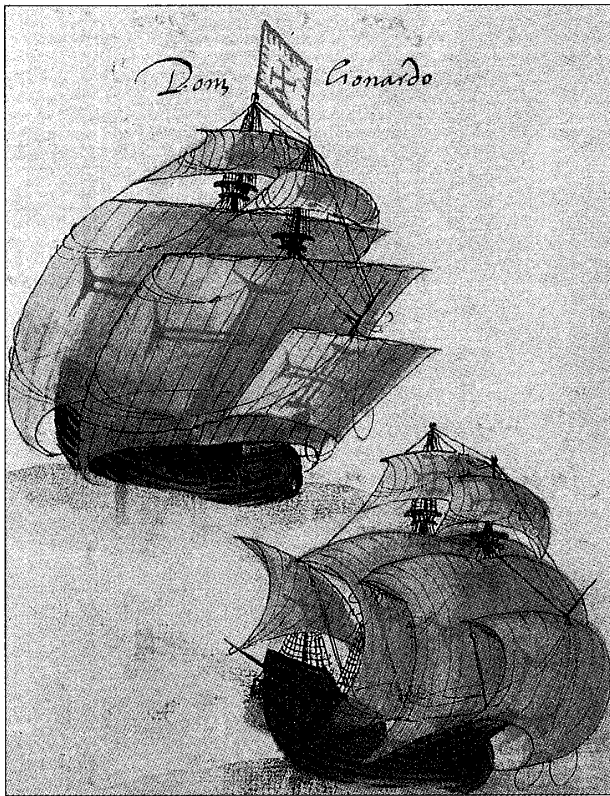


図 6

作るための材料も失って、カーボの沖合を漂うマヌエル・デ・ソウザにいかなる思いが去来したか、容易に想像がつくであろう。その思いは、彼の妻にとっても船員一同にとっても同じであったであろう。その時点ですでに船の損傷はひどくかなり浸水が進んでおり、沈没を免れる最良の手立ては、浸水の原因となっているフォアマストを切り倒すことであった。ところがいざ切ろうという段になって、不意に大波が襲い、フォアマストは櫓孔板(tamboretos)から海に攫われた。辛うじて横静索を切断出来た他は手の施しようもなかった。しかもこのマストは倒れる時にバウスプリット〔船首斜檣〕(gurupés)を直撃し、ためにそのマストステップ〔櫓座〕(carlinga)が突き破られ、バウスプリットのほとんど全部が船内にめり込んだ。この結果、多少のマストが残ったことは不幸中の幸いではあったのだが、しかしながら、これ以上は何を試みてもかえって火に油を注ぐようなものであると予測され、一同の数々の罪のゆえにいかなる努力も事態の好転を齎さぬように思われた。カーボから航路を逸れて以後、この時点でまだ陸地を視界に収めることはなかったが、陸地からの距離は15から20レグア程度と推定された。

マストも舵も帆もなくしてからというもの、船は舷側を陸の方に向けて浮遊するだけであった。マヌエル・デ・ソウザと技工たちとは、もう手の施しようがないと判断し、失った一片に代わる舵を作るため、また、商品として携えている多少の布地を材料に応急用の帆を作るため、可能な限り最善を尽くす決心をした。そうした応急措置によって辛うじてモサンビーケに辿り着ければと思ったのである。そこで大急ぎで人々を、舵を作る組、取りあえずのマスト(alguma árvore)を作る組、帆らしきものを作る組に分けた。この作業には10日間ばかりを要したであろう。舵を完成させ取り付けてはみたが、細く短すぎて使い物にならない。それでも一か八か、出来上がった帆に風を孕ませてみたのは、こうするしか助かる方法はないと思われたからだ。いよいよ今度は操舵に取り組んだのであるが、案

ぐらぐらになっていたでしょう。シートが舵の役割を果たしたというのは、シートで帆を操りながら何とか針路を保とうとしたということでしょう」(杉浦氏の私信による)。

25) 原文は e desta vez lhe tornou a levar o vento a vela grande, e a que lhe servia de guia. メイントップの上方が風に攫われた時、辛うじて残ったメインスルもついに風に攫われたということか。

26) 原文 acudiram à vela da proa. 原文の直訳であるが、先程、取り込みを完了出来なかったフォアスルの取り込みに改めて駆けつけたということか。

27) 原文 então se atravessou a nau e começou a trabalhar. trabalhar は古い海事用語としては「風や波の結果として船が非常に難航を強いられる」の意(Leitão & Lopes, *op. cit.*, p.514)。下線部には「傾ぎ始めた」の訳語を当てる。

28) 原文 todos os machos ficaram metidos nas fêmeas. 原文の直訳であるが、「すでに3箇所の舵針は失われているはず。残った舵針があってこれらは壺金に嵌まっていたということでしょうか」(杉浦氏の私信による)。

海のことに通じている人なら、また、上の出来事をわが事のようにじっくり考えてみようとする人なら、舵もマストも帆も失った船に乗り、帆を



図7

の定、船は全然いうことをきかなかった。応急措置として作った舵の寸法が、波に攫われてしまったもう片方の舵のそれとは食い違っていたからだ。その時にはすでに陸地が一行の視界に入っていた。時に6月8日である。岸にかなり接近している上に、風波の力で船は陸地の方へさらに押しやられており、沈没を避けるには座礁するもやむなし、と思われた。誰もが運命を神の御手に委ねた。実際その頃すでに船は浸水に苦しみながらも、神の奇跡によってなお海上に浮かんでいた。

マヌエル・デ・ソウザは陸地に接近して、もはや万策尽きたと判断すると、士官たちの意見を聴取した。一同は揃って次のように述べた。波の危険から自分たちの命を守る手立てであるが、このまま流されるに任せて水深10ブラサ²⁹⁾の所へ行くのが良き選択である。上の水深に達したなら、上陸用のバテル³⁰⁾を外に運び出すため投錨する、と。ただちに数名の者を載せてマンシュア³¹⁾が1艘浮かべられた。この連中には上陸することが可能な良好な泊地が浜辺にあるかどうか、探りを入れる役目が課せられた。もし運良くその条件に叶う泊地があれば、バテルやマンシュアに乗って一同そこに乗り着け、上陸を果たした後、可能な限り食糧と武器とを運び出すよう努める。もっとも、たとえガレアン船から財貨を運び出しても、結局、一行の失うものがさらに増加するだけであろう。それはカフル人どものせいであり、彼らが我ら一行の略奪を行なうのは必定だからである、と言う者もいた。上の助言に従って、片側のシートを緩めたり反対側のそれを締めたりしつつ³²⁾、一同は波と風とに翻弄されていたが³³⁾、もはや舵は全然利かず、甲板(coberta)の下には15パルモ以上の浸水があった。いよいよ船が陸に近づくと測鉛を下ろし、依然かなりの水深があると分かったので、従前通り漂うがままでいた。それから相当な時間を経て、先刻送り出したマンシュアが船に戻ってきて言うには、この近くに浜があり、もしその浜に達することが出来れば上陸は可能であろう。しかし他は悉く切り立った断崖あるいは巨大な岩場であり、そこに流れ着けば船はひとたまりもなかりとうの由であった。

29) 原綴り braça. 測鉛を利用して水深を測る際に用いる単位。昔のポルトガルでは1ブラサは10パルモ〔掌尺〕に相当し、2 m20cm に当たる (Sérgio [ed.], *op.cit.*, p.21, nota)。

30) 原綴り batel. 大型帆船の内部に設けられた舟艇の中では最も大きなタイプ。これは起重機で持ち上げて海に降ろすことが必要であった (*ibid.*, nota)。

31) 原綴り manchua. 元来はマラバール海岸で用いられ、一本マストに四角帆を備えた小型船 (語源等については、cf. Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, II, New Delhi & Madras, Asian Educational Services,

1988 [first edition: 1921], pp.19-20)。ここでは舳かボートの意味であろう(Sérgio [ed.], *op.cit.*, p.21, nota)。

32) 原文 *alargando de uma banda e caçando da outra*; (.....). 不定詞の *caçar* は「帆のシートを引き寄せてその握りを船縁に近づける」の意。*alargar* はその反対語で「シートを緩める」の意(*ibid.*, nota)。

33) 原文 *foram arribando ao som do mar e vento*, (.....). セルジオのパラフレーズ *foram deixando-se ir impelidos pelo mar e pelo vento (ao sabor do mar e do vento)*に従って(*ibid.*, nota), 拙訳の通り。

船員一同が知恵を絞り、考えあぐねた末に下した決断、それが以下のような結果を齎すとは、誠にもって驚きを通り越し、呆然たる気持ちになる。すなわち、このガレアン船が漂着したのは、人もあろうにカフル人が群れ棲む土地であったのだ。実は危険極まりないことであったのに、この浜に上陸することこそ、自分たちの命を救う最良の手立てである、と信じての措置であった。これによって、マヌエル・デ・ソウザやその妻子にどんな艱難が待ち受けていたか、もう読者には想像がつくであろう。マンシュアからの報告を得たので、何とか例の浜のある方向へ向かい、マンシュアの連中に言われた辺りに着いた。その時点ですでに水深は7ブラサとなっていたのでそこに投錨し、大急ぎでバテルを海に浮かべるために必要な船具を準備した。

バテルを海に下ろすや最初に行なったこと、それは陸の方向に向けて第二の錨を下ろすことであった。すでに風は穏やかになっており、ガレアン船の位置は陸から大弓(*besta*)の射程距離の2倍程度であった。マヌエル・デ・ソウザは、ガレアン船を手の施しようもないまま沈むに任せるしかないかと悟ると、メストレとピロットを呼び、まず最初に君たちが為すべきことであるが、それは、私を陸へ送り届けることだ。無論これにはわが妻子が伴い、さらに私たちを警護すべき20人が従うものとする。その後で武器や食糧や火薬、それにカンブライア³⁴⁾の布地を運び出して欲しい。これがあれば、陸に上がってから手蔓を求めて食糧との交換が行なえるかも知れない、と言った。上のことを実行に移すには、上陸地点に樽を積み上げて原住民の襲撃を避けるための囲いを拵え、船から取った材木で急造の

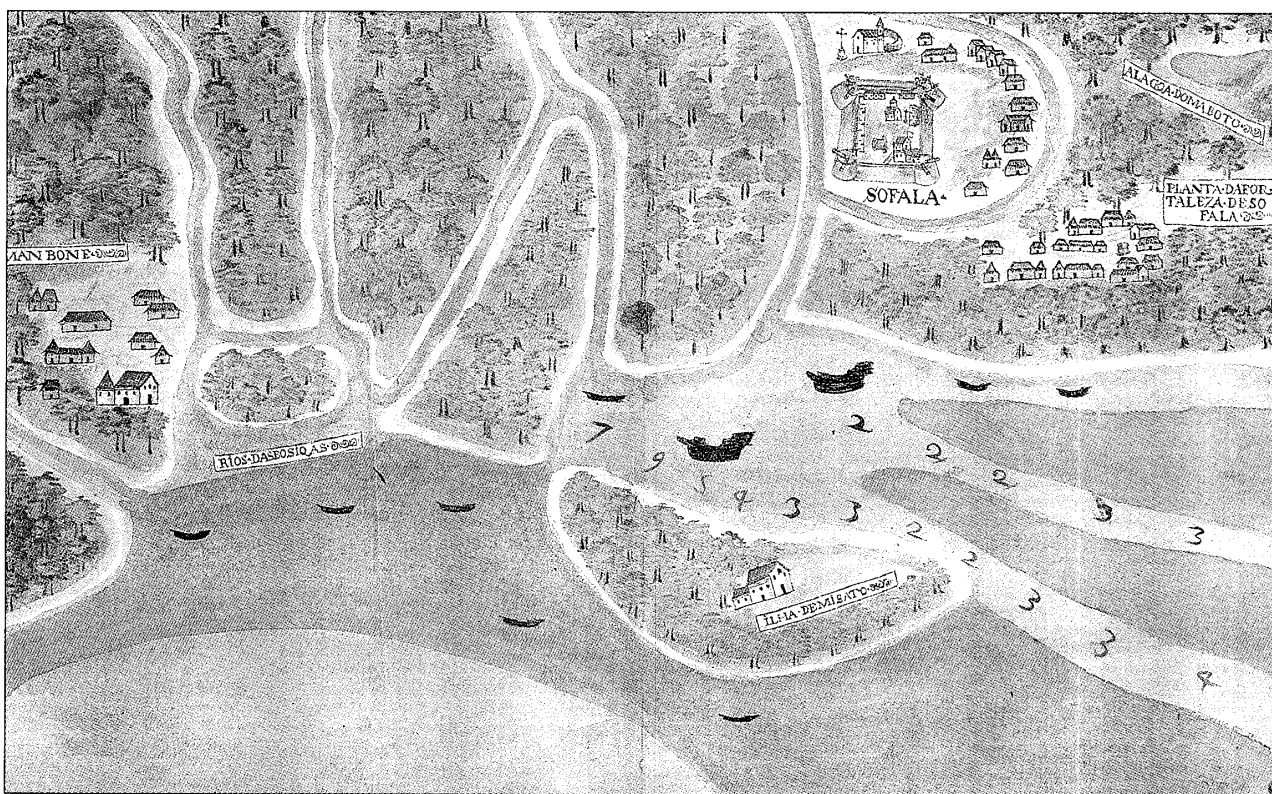


図 8

小型船(algum caravelão)を造り、それでもって使者を遣りソファラ Sofala へメッセージを届けることが肝要である。しかし、カピタンがその妻子や随伴者もろともこの地で命果てることは、運命として定められていたかのようであり、衰運の挽回を図るための措置などもう考えることも出来なくなっていた。例の場所に防備を施そうと考えているまさにその時、再び風は非常な強さで吹き始め、波も高くなり、その結果ついにガレアン船は座礁に至り、ために企てていたことの一切が水泡に帰した。その時までにはマヌエル・デ・ソウザとその妻子、それにおよそ30人の人々が陸に上がっていたが、他の連中はすべてまだ船の中であった。カピタンやその妻が例の30人と共に下船した際に味わった危険については、いまさら言うまでもないであろう。しかし現実に起きた痛ましい出来事を語る以上、このことを避けて通るわけにはゆかない。すなわち、かのマンシュアは3度にわたり陸と船とを往復したのだが、不運にも、その最終回に沈没、ために数人の命が失われたのだ。死者の中にはベント・ロドリゲス Bento Rodrigues の息子が含まれていた。一方バテルはどうしたかと言うと、その時までには一度も陸へは達しておらず、船に残る連中もこれを陸へ向けて送り出す勇気はなかった。波は大荒れの状態である上に、かのマンシュアがその軽快さを活かして最初の2往復を無難にこなしていたからである。

34) 原綴り Cambraia. 亜麻または木綿製の薄手で透き通った布地。もともとカンブライア(ポルトガル語読み)とはフランスの町でこの布地の生産地であったのが、上記を意味する普通名詞に転じた(António de Morais Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*, II, décima edição, [Lisboa], Editorial Confluência, [1950])。

メストレとピロット、そしてまだ船内に残っていた他の人々は、ガレアン船が陸側では錨索に引かれているのを確かめる一方、海側ではそれがすでに切れていることに気づいた³⁵⁾。錨索が切れたわけは、海底が岩だらけであり、そこに投錨して2日もの時間が経過していたからだ。3日目の朝が来、ガレアン船の頼りは陸側に下ろした錨索だけであり、風が唸りを立て始めてもいるので、ピロットは仲間の連中にこう言った。あたかも船底がいよいよ海底を擦ろうかとする時であった。「兄弟たちよ。浸水が激しくなつてついに沈没へと至らぬうちに、本船を脱出せねばならぬ。私と一緒にあのバテルに乗りたいと思う者はついてくるがよい」と。かくてピロットが乗り込み、続いてメストレを乗り込ませた。メストレは老人で歳のために気力はとうに失せていた。風が強かったので大いにてこずった末、およそ40人が前述のバテルに乗り込んだ。波打ち際でさえ波は山のようにあり、浜に打ち上げられるや、バテルはたちまち木っ端微塵に砕けた。そのバテルに乗った連中は、主の思し召しにより、ひとりの例外もなく一命を取り留めた。奇跡である。なぜなら、陸に着かぬうちにそのバテルは大波を受けて転覆していたからだ。

35) 原文 *entenderam que a amarra do mar se lhe cortara, (.....)*. 陸側に下ろされた錨索に対して、海側に下ろされた錨索。海底の石がこれを断ち切ってしまったのであろう(Sérgio [ed.], *op.cit.*, p.23, nota)。

前日に上陸していたカピタンは、浜で船員たちを励まし続け、また寒さが厳しかったので、出来るだけ多くの人々に手を差し延べては、自らが熾した焚き火のもとへ連れていった。依然として船内に残っている者は優に500人を数えた。そのうち200人がポルトガル人で、残りは奴隷であった。その中にガレアン船のコントラメストレであるドゥアルテ・フェルナンデス Duarte Fernandes と、グアルディアンがいた。船は相変わらずの状態、繰り返し繰り返し強い波に打ちつけられていたので、陸へ十分に接近出来るよう、錨索を手で緩めるのが良き判断かと思われた。ただし、それを行なうと引き波のために沖へ押し戻される危険があったから、錨索を切ってしまうのは憚られた。一時、揺れがなくなったと思ったも束の間、ついに船は真ん中からまっぶたつに割れてしまった。すなわち、メインマストよりも前の部分と、メインマストから船尾にかけての部分とである。それからさらに小一時間経つと、ふたつの部分はさらに割れて四つになった。ぱっくりと開いた隙間から、商品や箱が浮かび

上がり、船内にいた連中は海へ飛び込み、箱や木片に縋りついて陸に達した。海に飛び込む時、40人以上のポルトガル人と70人の奴隷が命を落とした。残りの人々は神の御加護により、あるいは波の上を泳いで、あるいは波の下に潜って陸に達した。釘や破片のために怪我をしている者が多数いた。その4時間後、ガレアン船はばらばらに壊れ、1ブラサばかりの木片さえ見つからぬ有り様であった。暴風は一切の残骸を浜に打ち上げた。

ガレアン船に搭載されていた商品は、国王のものもあれば私人のものもあった。合わせてその価値は金1コントに相当したと言われる。インディアが発見されて以来この方、これほど豪華な積荷の船がかの地から出発したことはない。船がばらばらに壊れてしまったので、カピタンのマヌエル・デ・ソウザは、かねて造ろうと決意していた応急船の建造を断念した。バテルは跡形もなく、応急船の艀装に役立ちそうなもの、そしてそれを建造するための材料など何ひとつなかったため、別の方策を練ることを迫られた。

カピタンもその随員たちも、もはや応急船を造る手立てがないと知ると、配下の技工たちや、カピタンが側近として連れていたフィダルゴたち——パンタレアン・デ・サ Pantaleão de Sá, トウリスタン・デ・ソウザ Tristão de Sousa, アマドール・デ・ソウザ Amador de Sousa, それにディオゴ・メンデス・ドウラード・デ・セトゥーバル Diogo Mendes Dourado de Setúbal といった面々である——の助言に従って、病人たちが元気を取り戻すまでの数日間は、ガレアン船から脱出したこの浜に留まるべきだ、幸いに水もあることだから、と意見を纏めた。そうと決まると、長持や樽でもって囲いを作り12日間滞留した。その間ずっと現地の黒人は、誰ひとりとして彼らに接触しに来なかった。僅かに最初の3日間、9人のカフル人が高台に姿を見せ、そこに2時間ばかりいたようであるが、我々との間に言葉を交わすことは全然なかった。やがて慌てふためいたかのように、姿を消してしまった。そこでその2日後、我々との話し合いに応じてくれそうな黒人たちがいないかどうかを調べるため、ガレアン船の船員ひとりと、同船に乗ってきたカフル人ひとりを遣わしてみるのが良さそうだということになった。その狙いは、取り引きによって食糧を得ることにあった。ふたりは2日間歩き廻ってはみたものの、生きた人間には全然出逢わず、眼にしたのは、藁葺きの家が数軒のみで、しかもすべてが無人であった。黒人たちは恐怖を懐いて逃げたのではないか、とふたりには考えられた。やがてふたりは露営地に戻ったが、その途次に見かけた数軒の家には矢が突き立ててあった。これは、彼らの間では戦いを知らせる合図だと言われる。

ガレアン船から脱出した地点に留まってさらに3日経った頃、7～8人のカフル人が牛を連れて高台に姿を現わした。高台から下りてくるよう彼らを手招きし、カピタンと4人の船員たちが話をしようと彼らの方へ行った。カフル人は身の危険がないと判ると、鉄が欲しいと身振り以示した。そこでカピタンは釘を6本用意させ、彼らに見せた。すると彼らは大変喜び、さらにわが同胞たちに近寄ってきた。そして彼らが連れている牛の値段をめぐる交渉に入った。その取り引きに折り合いがついた頃、別の丘に5人のカフル人が現われ、彼らの言葉で、釘なんぞと引き換えに牛を渡してはならぬ、と大声でまくし立てた。すると、そばにいたカフル人は何も言わずに牛を連れて立ち去った。カピタンは彼らから牛を取り上げることは控えたが、妻子のことを思えば、やはりこれは絶対になくはならぬものであった。

そこに留まる間、マヌエル・デ・ソウザは常に用心に用心を重ね、見張りを欠かさなかった。每晚3度や4度は起き出して見廻りを行なったが、それは彼にとって相当な負担であった。そうこうして12日間が過ぎた頃、人々に元気が戻ってきた。その頃には全員が歩ける状態にあると判断されたので、カピタンは今後為すべきことに関する意見を徴するため、一同を召集した。カピタンは本題に入る前に次のような講話を行なった。

「諸君、我らひとりひとりの罪のため、今や、我らがどのような境遇に立ち至ったか、を篤と考えて欲しい。もっとも、我ら全員が御覧のような窮地に立たされているのは、もっぱら私一己の罪の所産であると、私は心底そう思っている。然るに、わが主は慈しみの御心をもって、我らに大いなる恵みを垂れ給うた。そのお蔭で、あのように甲板の下まで大量の水に漬かりながら、我らは船ごと海の藻屑と消えずに済んだ。主に願わくは、我らをキリスト教徒の土地へ導き給わんことを。キリスト教徒を探索するその道半ばで、多大な苦難の果てに一生を終えた仲間について言えば、彼らの靈魂が救済されることを、主は必ずや嘉し給うであろう。ここ数日間、我らはこの地点に留まったが、その日々は諸君もよくお分かりの通り、仲間の病人の体調が戻るのを待つに必要な期間であった。今や、神は誉むべきかな、彼らも歩くことが出来るまでに恢復している。私が諸君を集めたのは、他でもない、我らの生還を期するため、どの道を辿れば助かるか、それについて一致した見解を得るためだ。当初は、陸路を採らず応急の小型船を必ず造るのだ、という気持ちがあったが、諸君も御存知の通り、その狙いは頓挫した。小型船を造りたくともそれに必要なものは何ひとつ船から持ち出せなかったからだ。よって、諸賢ならびに兄弟たちよ、諸君と私とは、今や、生きるも死ぬるも一蓮托生の身の上、全員の意見を徴することなく、私だけで物事を遂行したり決定したりするなどあってよいことであろうか。諸賢ならびに兄弟たちの意見に耳を傾けたいゆえんである。最後に、くれぐれも諸君にお願いするのだが、わが妻子が足手纏いとなって、私が諸君らのように歩けなくなった場合でも、どうか、見棄てたり置き棄てたりしないで欲しい。今がそうである如く全員が一体となって初めて、わが主はその御慈悲により、我らの一命を取り留めて下さるであろう。」

この講話が終わり、どの道を進むべきかについて全員で話し合った後、他に選択肢がなかったこともあって、出来る限りきちんとした隊列を組んでこの浜沿いを行進し、ロウレンソ・マルケス Lourenço Marques³⁶⁾が発見した河まで行くべきである、との意見に落ち着いた。一同はカピタンに約束して、決してカピタンを見棄てはしないと述べた。そして即刻前進を実行に移した。その河までは海岸沿いの直線距離では180レグア程度であったろう。が、彼らの歩いた距離は優に300レグアを超える。道中で遭遇した河や沼沢地を超えるため幾度も大廻りをしては、また海辺へ戻るということを繰り返したからだ。そのために一行が費やしたのは5ヵ月半であった。

36) ロウレンソ・マルケスは東アフリカで活躍し16世紀半ばに交易を企てて数次の探検事業を試みたポルトガル人。1544年(つまりマヌエル・デ・ソウザの難船の8年前)、彼はアントニオ・カルデイラ António Caldeira の一行と共に南緯25度14分のリンポポ Limpopo 河に到達し、原住民との交易に成功する。そこからさらに交易を続け、儲けを大きくするために南の方角へ向かい、ロウレンソ・マルケス湾に注ぎ込む3本の河のうちのふたつ目に到達した。この3本の河は合流し、エスピリト・サント Espírito Santo 河となってロウレンソ・マルケス湾に注ぐ。この河にせよこの湾にせよ、すでにポルトガル人の航海者ジョアン・ダ・ノヴァ João da Nova が1501年かその翌年、ヨーロッパ人として初めて“発見”していたが、彼の名前が当地の命名に関わった事実はないようである。

ドン・ジョアン三世 D. João III はドン・ジョアン・デ・カストゥロ D. João de Castro の提案により1546年、ロウレンソ・マルケス湾に注いでいるもろもろの河川の探査を行なうよう——これらこそマヌエル・デ・ソウザの一行がどれがどれと知らずに渡った河である——、そして武装した商館を建てるよう命じた。ロウレンソ・マルケスはその土地に定着して原住民との間に友好関係を結び、象牙と銅の取り引きに励んだ。1557年にコーチンの商館書記に任命されている。アグアード・ダ・ボア・パスをロウレンソ・マルケス湾に比定する「報告」の記述〔57・59頁参照〕は、セルジオによれば誤りである。アグアード・ダ・ボア・パスはこれより北に位置する泊地であり、そこに注ぐ河はイニャリメ Inharrime 河と呼ばれる (cf. Sérgio [ed.], *op.cit.*, pp.25-26, nota)。

彼らは南緯31度の浜で遭難したが、そこから次のような隊列を組んで行進し始めたのは、1552年7月7日である。すなわち、マヌエル・デ・ソウザとその妻子に、ポルトガル人80名と奴隷たちが随行し、ピロットのアンドゥレ・ヴァスがその一同を率いて、十字架の描かれた旗を高く掲げつつ先頭を



図9

んだ距離はせいぜい30レグアそこそこであろう。その頃にはもう10人か12人の死亡者が出ていた。例えば10歳か11歳になるマヌエル・デ・ソウザのただ独りの庶子である。この子は飢えのため衰弱がひどく、彼と、彼を背中に負ぶってきたひとりの奴隷が後方に遅れてしまった。マヌエル・デ・ソウザがこの子のことを尋ねて、廻りの者たちから半レグアばかり後方にいらっしゃいます、と言われると、彼は気も狂わんばかりに取り乱した。こうして彼はこの子を見失ってしまったのであるが、そのわけは、これまでたびたびそうであったように、この子がパンタレアン・デ・サ——この子のおじである——と一緒に殿のしんがり一団にいるものと思い込んでいたからだ。ただちに彼はこう約束した。わが子を探し求めるために取って返してくれる者がふたり欲しい。このふたりには500クルザードの褒美を取らそう、と。しかしたとえ500クルザード貰っても、この申し出に応じたいと思う者はいなかった。もう宵闇が迫っていたし、虎やライオンの心配もあった。後方に遅れてしまった人間を、猛獣どもが餌食にせぬはずはないであろう。それに彼としても、進みつつある道から逸れるわけにはゆかず、息子のことは脛に焼きついて脳裡を去らなかつたけれど、万やむを得ずこれを見殺しにした。ここからも、マヌエル・デ・ソウザというフィダルゴが自分自身の死までに嘗めた心痛の大きさがお分かりいただけよう。旧インド総督であったロポ・ヴァス・デ・サンパイオ Lopo Vaz de Sampaio の甥であるアントニオ・デ・サンパイオ António de Sampaio も力尽きたし、ポルトガル人5人か6人、奴隷数人も、ひとえに飢えと強行軍の労苦とが祟って死んでいった。

この時すでに何度か、一行はカフル人たちとの戦闘を体験していたが、しかし連中には一方的にやられるばかりであった。ある小競り合いではディオゴ・メンデス・ドウラード Diogo Mendes Dourado が殺された。彼は勇敢な騎士らしく死ぬまでよく戦った。見張りや飢えや行進に伴う一同の苦痛は尋常ではなく、そのため来る日も来る日も、人々の衰弱はますます深まった。ついに歩けなくなって、辺りの浜やジャングルの中に置き棄てにされる者がひとりやふたり出ぬような日は一日としてなかつ

歩んだ。カピタンの妻ドナ・レオノールは、奴隷たちが輿に乗せて運んだ。ガレアン船のメストレが、水夫や女奴隷たちを従えてそのすぐ後ろに続いた。殿を歩んだのはパンタレアン・デ・サであり、彼に残りのポルトガル人や奴隷たちが従った。彼らだけで200名にも達していたであろう。合わせると総勢500人ばかりであり、その内ポルトガル人は180名であった。このようにして1ヵ月の間、募る苦勞、飢えや渇きと戦いながら前進した。なにしろその間一同が口にしたのは、船から辛うじて持ち出した米と、辺りに生えている生の果物とが少々という有り様だったのだ。これ以外、土地の食糧にありつくことはなかつたし、食糧を売ってくれる人間にも出逢わなかつた。彼らが体験したひもじさは悲惨極まるもので、その様は体験者でなければ信ずることも筆にすることも出来ぬと思う。

この1ヵ月をまるまる費やして、彼らは100レグアは歩いたことになるであろう。幾つかの川を渉るに際して大迂回をしているので、海岸沿いに進

た。やがてそうした人々は、この土地にうようよといる虎や蛇の餌食になった。彼らを置き去りにしてゆく——しかも、連日のように彼らを生きたままこの荒れ地に残してゆく——のは、疑いもなく、残す者にとっても残される者にとっても心痛・悲嘆の極みであった。置き去りにされる者は、これまで自分と一緒に歩いてきた人々に対し——それは両親に対する場合もあったし、兄弟なり友人なりに対する場合もあった——、後生だから先に行ってくれ、そして自分たちが神の御手に懐かれるよう祈ってくれ、と言ひ募った。もう少し経てば獰猛な獣に食われてしまうと分かっているながら、何ら助けの手も差し延べてやれぬまま肉親・友人を見殺しにするのは、どれほど凄絶な痛恨事であったろう。こうした話はただ聞くだけでも苦痛に堪えないのであり、まして実際にその場に立ち会い経験した者に齎された苦悩はどれほどであったろう。

こうして極めて多大な苦しみの中で、一行は前進を続けた。食べ物を探し河を渉るために奥地に入り込んだあげく、高地に登り、極めて危険の大きな高地を下って、また海沿いの道に戻る、というのが通例であった。上の苦難だけではまだまだ不足であるかのように、カフル人たちから蒙る迷惑がこれに重なった。こうして彼らは約2ヵ月半前進を続けたが、その間彼らが苛まれた飢えと渴きは筆舌に尽くしがたく、その期間はほぼ絶え間なく、誠に驚くべき出来事が次々に起こり続けた。その中でも最も注目し得る事柄を幾つか語るとしよう。

これらの連中の中で、1クアルティーリョ³⁷⁾の水の入った水差しが10クルザードで売られるということがあった。それに、4カナダの水が入った大鍋1個³⁸⁾に100クルザードの値がついた。このことをめぐっては時折常軌を逸した行動が見られたので、カピタンは、もうこれ以上大きなものは一行の中にはないというほどの大鍋を1個持ってこさせ、そうして、この大鍋に水を入れてくる者へ100クルザードを与える約束をし、彼が手ずからその水を分配することにした。彼が妻子たちを思って得た水のためには、4分の1カナダ当たり8~10クルザードの出費があった。上のやり方で彼は水を分配し、その結果、常に彼は一同の渴きを癒すことが出来た。というのは、ある日水を汲んでくることによって拵えたかねに味をしめて、次の日は水を探しにゆこう、そして利益を求めて敢えて危険に身を曝そうという連中が現われる、という具合になったからである。それにもかかわらず、一同が悩まされた飢えはひどいままであり、浜で見かけたいかなる魚も、山で殺したいかなる獣も、多額のかねを出してその所有者から手に入れようとする手合いが跡を絶たなかった。

37) 原綴り *um quartilho*. 昔の枡量。1カナダ (=1.4lit) の4分の1 (大武和三郎著『葡和新辞典』日本出版貿易株式会社, 1969年〔初版1937年〕)。

38) 原文 *em um caldeirão, que levava quatro canadas*, (.....). 前の註を参照すると、4カナダは5.6litとなる。

辿り着いた土地の様子を判断しつつ、しかも上述した通りの苦労を常に払いながら前進を続けるうちに、ただひたすらかのロウレンソ・マルケスの河——これがすなわちアグアード・ダ・ボア・パス³⁹⁾である——を必ず探し出すのだという決意を持って前進すること3ヵ月ばかりが経過したのであろうか。自分たちを支えるのは、たまたま出遭った果物と、炙った骨だけという日が何日も続いた。露营地では、蛇の皮が1枚15クルザードで売られることがたびたびであった。皮はからからに干からびていたが、手に入れた者はこれを水に漬け、そうして食った。

39) 原綴り *Aguada da Boa Paz*. 「善き平安の給水地」の意。実際はアグアード・ダ・ボア・パスはここよりやや東北方にあるイニャリメ *Inharrime* 河の河口のこと (cf. Sérgio [ed.], *op.cit.*, p.29, nota)。

浜沿いに前進してゆく間、彼らが生きる糧としていたのは、浜辺に打ち上げられた海産物や魚であった。そのようにして過ごした期間の終わり頃、一行はひとりのカフル人に出逢った。彼はふたつの部落を統べる領袖であり長老であり、一行には人品卑しからぬ者のように思われた。接してみると果たしてその通りであり、そのことは彼のもとで受けたもてなしぶりによって確かめられた。彼が一行



図10

に言うには、ここから動いてはいけない、私のもとに留まるがよい、諸君の扶養については、私が出来る限りのことをしてあげよう、と。もっとも実際には、かの土地に食糧がたっぷりあるというわけではなかった。それは土地に食糧を産み出す地力がないからではなく、カフル人はごく僅かに種を蒔く以外何の種も蒔かないし、食べる食肉も狩りで屠った野生動物の肉だけなのである。

このカフル人の王は、マヌエル・デ・ソウザ、それに彼と同行する人々に対して強く懇願し、次のように語った。諸君が通過せねばならない土地を支配する別の王と私とは、交戦状態にある。ついでに諸君の助けが欲しい、と。さらにこうも語った。これより先に行けば、あの王の略奪に遭うこと必定だ。諸君はこれをいやというほど思い知らされるだろう。しかも、この王はわしよりもずっと強力だぞ、と。彼がこうしてわが一行から利益と援助とを引き出すことを期待していたのは事実であり、かつそこに滞在したことのあるロウレンソ・マルケスや、アントニオ・カルデイラ

António Caldeira から聞き知ってポルトガル人がいかなる民であるか、情報を得てもいたので、わが一行がそこを立ち去らぬよう出来る限りの努力を払った。これらふたりの男たちによって王様はガルシア・デ・サ Garcia de Sá と命名されていた。なぜなら、この王は、インディア総督を務めたガルシア・デ・サと同様に老齢であったばかりか、この人物の容貌に瓜二つであったからだ。それにもうひとつ、彼があの人柄を彷彿とさせる善人であったからだ。紛れもないことだが、どこの国民にも、見かけは善人だが根は悪人という手合いがいる。しかし彼は文字通りの善人であり、ポルトガル人たちを心からもてなし、これを大いに大事にして、これ以上の前進はおやめなさい、と力の及ぶ限り説得を続けた。そしてわが一行へ次のように念を押した。かの王は私の交戦相手だ。奴のために諸君は必ず略奪されるぞ、と。この言葉に動かされて、一行は6日間だけ出発を延引した。しかしマヌエル・デ・ソウザがその随員の大半を道連れに滅びてしまうことは、予め決定済みの事柄であったと見え、せつかく我らの誤りを悟らせようとしてくれたこの善良なる王様の忠言に、わが同胞たちは従おうとしなかったのである。

カピタンがそれでもそこから立ち去ろうとする決意を固めているのを知ると、王様は、出発前に、自分の背後にいるひとりの王に対抗するため、諸君の一行の中から数名を割いて私の手許に残し、これでもって私に加勢してもらいたい、と述べた。マヌエル・デ・ソウザとポルトガル人たちには、この王様から受けた善意の数々や、手厚いもてなしのゆえに、また、この王様の不興を買いたくはないという思惑もあって、彼からの要請は無下には断われぬ、もはや自分たちの生殺与奪の権は、この王とその配下の連中に握られている、と思われたので、マヌエル・デ・ソウザは、義兄弟のパンタレア・デ・サに、ポルトガル人20名を連れて親愛なる王様の加勢に赴いてくれないか、と頼んだ。パンタレア・デ・サは、20人の男たちと500人のカフル人、さらにその長たちと一緒に出発し、やって来た道を6レグア後方へ引き返した。そして蜂起して猛威を振るっている一カフル人と戦い、彼からす

べての家畜を奪い取った。これがその時の戦利品であった。この家畜を携えて、彼はマヌエル・デ・ソウザが王様と共に待つ野营地へ戻った。この行動に5日か6日が費やされた。

パンタレアン・デ・サと、彼に同行して王様への加勢に赴いた連中が戦いから戻り、かの地で嘗めた労苦の疲れを癒すと、カピタンは出発するという既定方針について、再度一同に助言を求めた。しかしながらこの助言がまったく拙いもので、一同が達した結論は、前進を続け、かのロウレンソ・マルケスの川を探し求めるべきであるというものであった。そもそも、自分たちが今その河の辺りにいるということすら彼らには分かっていなかったのだ。ロウレンソ・マルケスの河は、アグアーダ・ダ・ボア・パスの河にほかならず⁴⁰⁾、3本の支流を有し、そのすべてが合流してひとつの河口から海に注いでおり、彼らはその内のひとつ目の支流にいたにすぎないのである。そして、その辺りで赤いしずくを一滴認めていたにもかかわらず——これはすでにポルトガル人が辺りに来ていることを示す徴であった——⁴¹⁾、幸運の女神は一行をもう見放していたのか、もはやその脳裡には、さらに前進を続けるという思いしか浮かばなかった。かくて彼らはその河を渉ることになるのだが、なにぶんにも大きな河であり、アルマディア⁴²⁾によらねば渡渉は不可能であった。で、カピタンは鎖でもって係留してある7〜8艘のアルマディアを入手しうるかどうかが知ろうとした。それらを用いてこの河を渉ろうというのであるが、このアルマディアを与えることには、王様がなかなか首を縦に振らなかった。彼らを手許に引き留めておきたいという願望のゆえに、王様はあらゆる手立てを尽くして彼らの渡渉を阻止しようとしたのである。そこでカピタンは、これらのアルマディアを力づくで奪い取れぬかどうかを確かめに数名の男を遣ったところ、その内のふたりが戻ってきて言うには、それは至難の技である由。他方、現場に留まるよう言いつけられた連中は、悪意が萌したか、そこにあった数艘のアルマディアの1艘を自分のものにしてしまい、それに乗り込んで下流の方向へ姿を消し、カピタンを棄ててしまった。マヌエル・デ・ソウザは、こうなれば王様の厚意に縋らねばどう足掻いても渡渉は出来ないと見、王様自身のアルマディアで対岸に渡してくれるよう頼み込み、渡渉を助けてくれた人々にはたんまりとお礼をはずむ、と言った。そしてマヌエル・デ・ソウザは王様の歡心を買うため、手持ちの武器の一部を王に差し出した。王が自分への束縛を解いて、渡渉を許してくれるようにするためである。

40) 前註参照。

41) 原文 *sem embargo de verem ali uma gota vermelha, que era sinal de virem já ali portugueses, (.....)*. 下線部は「一滴の赤いしずく」の意であるが、これが何を意味するのかは未詳。ポルトガル人は通る道々に赤い染料か何かのしずくを滴らすことによって踏破の印としたのか、とセルジオは推定するが、言下にこれをまったく不完全な仮説と自認する (cf. Sérgio [ed.], *op.cit.*, p.29, nota)。

42) 原綴り *almadia*. 木を割り貫いて作った細長い舟。カヌー (*ibid.*, nota)。

すると王様は、単独で彼のもとに歩み寄ってきた。ポルトガル人たちは、渡渉に際して何らかの裏切り行為があるのではないか、という懸念を懐いていたので、カピタンのマヌエル・デ・ソウザは王に懇願して、次のように言った。どうか配下の人々と部落へお引き取り下さい。そして私の配下と共に、私の思うように渡渉させていただきたい。ただアルマディアを漕ぐ黒人たちだけは残していただきたい。この黒人の王様の心中にはいささかも邪念はなく、それどころか、出来る範囲でわが同胞たちへ救いの手を差し延べようと懸命だったのであるから、これを説得してその部落へ引き取ってもらうのは、わけないことであった。王はあっさりその場を立ち去り、マヌエル・デ・ソウザを自由に渡渉させた。そこでマヌエル・デ・ソウザは30人の人員に、数艘のアルマディアに分乗して対岸へ渉よう命じた。彼らには3丁の火繩銃 (*três espingardas*) を持たせた。こうして30名が対岸へ渡り終えると、カピタンとその妻、さらにその子供たちがあちらへ渡り、彼らの後に他の全員が続いた。最後まで略奪を受けることなど全然なく、ただちに隊列を整えて前進を再開した。

2本目の川に向かって5日ばかり行進したであろうか。おそらくは20レグアばかり歩いてわが同胞たちは真ん中の河に着いた⁴³⁾。そこで黒人たちに出逢い、彼らに案内してもらって海⁴⁴⁾へ出た。それはすでに日没時であった。その河畔に佇んでいた時、2艘の大きなアルマディアが眼に入った。一行は辺りの砂地に露营地を設営し、その夜はそこで眠った。この河の水は塩分混じりであり、はるか後方にあった淡水を最後に付近には淡水が全然なくなった。夜になって露营地における渴きは堪えがたくなり、このままでは皆死んでしまうであろうと思われた。マヌエル・デ・ソウザは多少とも水を探しに人を遣りたかったのだが、大釜一杯の水を汲んでくるとに100クルザード以下の礼金で構わない、という手合いは全然いかなかった。結局彼は人を遣って水を探させたのであるが、そのために費やした礼金の高は1日当たり200クルザードに達した。そのようにでもしなければ、水探しの件は埒があかなかった。

43) 原文 *teriam andado vinte léguas, quando chegaram ao rio do meio, (.....)*. 下線部の「真ん中の河」とはエスピリト・サント河かも知れない。これを河口まで下ると現在のマップトに出る。

44) 原文に *mar* とあるが海水混じりの河のことか。

前述のように食べ物のごく僅かである一方、渴きもほとんど極限に達していた。神の思し召しによって、水だけがわが同胞たちの露命を支える糧の役割を果たした。翌日、かの露营地に留まっていると、宵闇が迫る頃、黒人たちの乗った3艘のアルマディアのやって来るのが見えた。一行の中にいたある黒人女が彼らの言うことを多少は解し始めたので、彼女を介して黒人たちは次のように言った。あちらに1艘の船が来た⁴⁵⁾。あなた方のような人間が乗っていた。だが、もう去ってしまった、と。そこでマヌエル・デ・ソウザは、我らを対岸へ渡してはくれまいか、と彼らに伝えさせると、黒人たちはもう夜だから、と答え——カフル人は夜は何もしないのである——、翌日渡してやろう、ただし謝礼は貰う、と言った。夜が明けるや、黒人たちは4艘のアルマディアに分乗してやって来て、僅かばかりの釘を受け取ったそのお返しに、一行を渡し始めた。まず、カピタンは水路の保安のために若干の人々を渡渉させ、然る後に、妻子ともども1艘のアルマディアに乗り込み、対岸で残りの随員の到着を待った。カピタンと一緒に、3艘の別のアルマディアも人々を満載して渡河した。

45) 原文 *(.....) ali viera um navio (.....)*. 下線部は「そこへ」という意味で具体的な目的地は記されていないが、ロウレンソ・マルケス(現、マップト)を指すか。

噂によると、カピタンはその頃すでに頭がおかしくなっていたと言われる。絶え間ない見張りといひ激しい心労といひ、そうしたものが、他のすべての者にも増して彼に重くのしかかっていたのだ。このような状態であったので、黒人たちが自分自身に何か罫を仕掛けているものと妄想し、剣に手を掛け、アルマディアを漕いでくれている黒人たちに向かってそれを抜き放ち、こう言った。「犬どもよ、余を何処へ連れてゆくのか。」(《*Perros, aonde me levais?*》)

黒人たちは抜き身の剣を見ると、海⁴⁶⁾に飛び込み、ためにカピタンのアルマディアは転覆の危険に曝された。そこで彼の妻ばかりか、夫妻と行動を共にしていた者たちまでが、カピタンに、黒人たちに危害を加えてはなりません。皆死んでしまうではありませんか、と諫めた。誠にもってマヌエル・デ・ソウザの人となりを知り、その思慮分別なり穏和さなりを知る者が、こうした彼の振る舞いを眼にしたならば、もはや彼からはまともな判断力は失われている、かつては思慮も注意力もある人であったのに、と呟かすにはおれなかったであろう。それ以降はずっとこのような有り様であり、それまでのように、配下の人々を統率する力など彼にはなかった。一行が対岸に着くや否や、彼は頭の不調を強く訴えたので、その頭にタオルを巻いてやった。ともあれ一同のすべてが再びそこで顔を揃えた。

46) 前々註参照。

対岸に着いて歩き出そうとしていた時、カフル人の一団に出遭った。カフル人が戦いを仕掛けてき

そんな気配を見、今にも彼らの略奪に遭うのではないかと思われたが、彼らはわが同胞たちに近寄ってきて、彼ら同士で何かを喋り始めた。カフル人はわが同胞たちに何処の者か、何を探しているのか、と尋ねた。一行はカフル人にこう答えた。我らはキリスト教徒だ。諸君に心からお願いしたいが、我々をこの先にあるひとつの大きな河にまで案内してくれないか。そして諸君にもし食べ物があるのなら、それを持ってきてくれないか。買い取りたいと思う、と。ソファラ出身のあるカフル人の女を介して、黒人たちは一行に言った。もし食糧が欲しいのなら、俺たちの王様がいる部落までついてくるがよい。王様は大いにおもてなしなさるだろう、と。その時点でわが一行の人数はもう120人くらいであったろうか。すでにドナ・レオノールでさえ、徒歩で前進し続ける婦人たちのひとりとなっていた。身分高く繊弱にしてうら若い彼女が、野に働く逞しい男たちにとってさえ苦しいかの険路を、徒歩で歩むのである。彼女はしかし、自らに同行する婦人たちをしばしば慰め、彼女たちの子供に手を貸してやることを終始厭わなかった。しかもこれは、彼女がそれまで乗ってきた輿を担ぐ奴隷たちがいなくなっただけからの話だ。誠にもって、ここでは主の恩寵こそがすべての拠り所であったように思う。それなくしては、かくも弱々しく身を労することとは余りに無縁の婦人が、常に尋常ならぬ空腹と渴きに苛まれながら、あれほどにも長く険しい道のりを歩き通すことは、決して出来なかったであろう。すでに一行が歩いてきた道のりの里程は、ぐるりと大変な大廻りをしたためもあって300レグアを超えていた。

話を元に戻す。カピタンとその随員は、例の王がその近くにいると知ると、カフル人たちを案内役にして、細心の注意を払いながら、彼らと一緒に言われた場所へと進んだ。その間の飢えと渴きとがどれほどであったかは、神のみが御存知である。そこから王のいる所までは1レグアあった。着いてはみたものの、カフル人の王は一行に命じて、この場所に入ってはならぬ、ここは私たちが強く隠したいと思っている所なのだ、と言った。そして、私の部下が指示する数本の木々の袂に行って待っておれ。そうすればそこへ食べ物を届けてやろう、と言った。マヌエル・デ・ソウザは、未知の土地に来た者の常として、また、現在と違って当時の我らにはカフル人に対する認識が足りなかったせいもあり、言われた通りにした。今でこそ我らはこの難船を教訓としてカフル人に関する十分な知識を共有しているが、当時はそのようではなかったのだ。また、カフル人は悪魔を怖れる以上に火縄銃を怖がるのであるから、100人がこれを所持してゆくならば、この野蛮人の土地とて楽々と突っ切ることが出来ると分かったのは、ナウ船サン・ベント S. Bento 号の難破を教訓としてであった。

このようにして木々の蔭で一行が人心地ついた後で、釘との物々交換により若干の食糧が一行のもとに届き始めた。彼らはそこに5日間留まったが、出来ればインディアから船が来航するまではそこに留まってもよいように思われた。黒人たちも彼らにそうせよと言ってやまなかった。そこでマヌエル・デ・ソウザはカフル人の王に対して、わが妻子と一緒に寛げるような家を1軒提供して欲しいと言った。カフル人はこれに答えて、それでは1軒家を貸し与えよう。しかし君の部下はここに一緒にいてはならない。というのは、この土地には食糧が不足がちであり君の部下までは食べてゆけないのだ。君自身は妻子と一緒にここに残ってよく、君が必要とする数名の部下を伴わせるのも差し支えないが、しかし他の諸君はもろもろの部落に分かれてもらいたい。いつか船が来航するまで、この諸君にも食糧と住まいを与えるよう命ずるとしよう、と言った。

上のことは、王が後日一行に行なった仕打ちを考えれば、悪意に満ちた詐略であったようだ。この仕打ちから判断すると、カフル人が火縄銃をたいそう怖がる理由はよく判ってくる。そこに残ったポルトガル人には僅か5丁の火縄銃があるだけであった。丸腰の連中が120人を数えたのに、カフル人の王は敢えてこれに戦いを仕掛けようとはしなかった。カフル人の王としては、一行に対する略奪を成功させるため、自分たちだって飢えで死線をさまざましているのだと言い立てて、一行を分断しいろいろ

な場所に隔離したのである。一方において、わが同胞たちは、分かれ分かれにならぬことがいかに大事かに思い及ばず、いとも簡単に運命に身を委ね、わが仲間の破滅を画策しつつあるかの王の注文にまんまと乗ってしまった。常に真実を語り続け、出来る限りの便宜を図ってくれたあの親愛なる王様の忠告にてんで耳を貸さなかった自分たちの自業自得である。正しく行動しそうするだけの能力もあると自惚れながら、依怙地になってそのための発言もせず行動もとらず、すべてを神の御手に委ねてしまう人間どもの姿がそこにある。

ポルトガル人たちは自活すべくさまざまな村や場所に分散すべしという取り決めが、カフル人の王とマヌエル・デ・ソウザとの間に纏まると、王は彼に向かってこう言った。ここには私の助手どもがいて、これがあなたの部下を然るべき所へお連れする。つまり、ひとりひとりの助手が彼らの案内役となって、食べ物を差し上げるための算段を講ずるわけだ。ただし、だ。このことは、貴殿の口からポルトガル人に向かい、武器を放棄するよう命じぬ限りは不可能だ。なぜならカフル人は武器を目にしている限り、これを極度に怖がるからだ。ポルトガル人の船が来航すれば、その時ただちに返却するとして、武器はすべて一纏めにし1軒の家に閉じ込めておくよう貴殿より命じてもらわねばならない、と。

マヌエル・デ・ソウザの病状はすでにその頃にはかなり進んでおり、完全な判断力は失われていたと言ってよい。しっかりしていた時には出来たであろう適切な返答さえ怪しくなり、何を聞かれても、ああそれなら部下と相談しよう、と答えるばかりであった。しかし、いよいよカフル人の略奪に遭おうかというその時になって、彼は部下に話しかけ、部下に向かって、わしにはここを動くつもりはさらさらない、何とか手立てを見出して我らを助けてくれる船を探すつもりだ。さもなくば主が差し延べて下さるいかなる助けにも縋るつもりだ、と言った。彼の言うことには一理がなくもなく、一行の現在地はロウレンソ・マルケスの河であり、ピロットのアンドゥレ・ヴァスもまたその旨を彼に言い聞かせていた。さらにマヌエル・デ・ソウザが言うには、ここを立ち去りたいと思う者は、もしそれで良いと思われるのなら、そうすればよかろう。しかし私にはそれは出来ぬ。わが妻子への愛着がそれを阻むのだ。妻はすでに激しい労苦のために憔悴しきっているし、私自身もう歩くことは出来ず、私を助けてくれる奴隷たちもいない。私はもはや決意を固めているのだが、神のお召しがあり次第、家族を道連れに生涯を閉じようと思う。よって、諸君には次のようをお願いする。ここを離れて、ポルトガル人の船に出逢うことが出来たならば、自らであれ人を介してであれ、その朗報を私に届けて欲しい。私と一緒にここに残りたいと思うのなら、そうすればよい。私の迎る道をついてくればよい。しかしながらここに問題がある。黒人たちが私たちを信用してくれるよう、そして私たちが略奪を生業とする盗賊であると誤解されぬよう、彼らへ武器を渡してしまうことがどうしても必要なのだ。これは、これまで長い期間にわたって飢えに苛まれながら経験した不幸を出来る限り癒すための措置である、と。マヌエル・デ・ソウザの意見も、彼に同調する連中の意見も、全うな判断力を有する人の口から出たものとは思われなかった。これを聞いた人々は啞然として顔を見合わせ、それでもなお武器を手許から離さなかったが、その間は黒人たちも怖れて彼らには近づかなかった。やがてついにカピタンは武器を地面に置くよう命じた。この武器こそが、神に次いで彼らの救いの鍵を握るものであったのに。数人の者たちはこれに抗う様子を見せ、ドナ・レオノールはさらに強く抗う様子を見せたものの、一同は結局武器を引き渡した。彼女の他にはっきりと口に出して武器の引き渡しに反対した者はいなかった。もっとも彼女の反対としてほとんど効果はなかった。この婦人はついに言った。「武器を引き渡すのか。お前たちもろとも妾もついに破滅か」と。黒人たちは武器を引き取り、これをカフル人の王の邸に運び入れた。

カフル人は、ポルトガル人が丸腰になったと見るや、かねて仕組んでいた裏切りの手順に従って、

ただちに彼らを分断し略奪することを始めた。彼らはひとりひとりに下る運命に弄ばれるがままジャングルの中へ連行された。然るべき場所へ連れてゆかれた時には、彼らはもはや身に一糸を纏うことすら許されぬほどの素っ裸であった。そして手ひどく殴りつけられながら部落を放逐された。この連中の中にマヌエル・デ・ソウザはいなかった。彼は妻子やピロットのアンドゥレ・ヴァス、それに約20人の人々と一緒に王のもとに留まるよう求められたが、それは彼らの手回り品に、多くの宝飾品や贅沢な輝石、金目のものがあったからである。堅く信ぜられているところによると、彼の一行がここまで運んできた金目のものの価値は10万クルザードを超すという。マヌエル・デ・ソウザもその妻も、かの20人の人々も、他の連中から隔離されて、手回り品は残らず剥がされてしまったものの、着衣を剥がされることだけは辛うじて免れた。王がマヌエル・デ・ソウザに言い渡すには、とっとと出ていってお前らの仲間を探すがよかろう。これ以上ひどい目に遭わせたり、お前やらお前の妻やらの身体に手を掛けることだけは控えてやる。マヌエル・デ・ソウザは、事ここに至ったのを見て、武器を差し出したことがいかに大きな誤りであったか、今更のように思い返したであろう。しかし思いのままに振る舞う力はもはや彼にはなく、黒人どもの言いなりになるしか仕様がなかった。

カピタンから離れた仲間の総勢は90名であったが、その中にはパンタレアン・デ・サと、別のフィダルゴ3名が含まれていた。彼らもまた小人数ずつ偶然の赴くまま、互いに分かれ分かれにさせられ、王の諒解のもとに、カフル人たちの略奪を受け身ぐるみ剥がされてしまった。やがて90名の仲間は再び合流することが出来たが、それは連行された場所が互いにさほど遠く隔たっていないからであった。合流してはみたものの、手ひどく痛めつけられ意気消沈した彼らには、武器もなく着衣もなく、食べる物を交換で得るためのかねさえなかった。しかも自分たちを統率してくれる司令官を欠いたまま、前進を再開せざるを得なかった。

統率者をなくして、彼らはもはや人間の様相を呈してはおらず、さまざまな様子の道なき道を秩序なく前進し続けた。ある時はジャングルに入り込み、ある時は山並みに分け入って、ついにはばらばらになってしまった。もはやこの頃にはひとりひとりが、カフル人に出遭っても、モウロ人に出遭っても、自分だけは助かるよう精一杯の方策を実行に移すこと、これにしか関心はなかった。なぜなら、彼らの間に相談というものは一切行なわれず、そのために一同を召集する指導者もいなかったからである。もう完全に破滅してしまった人間たちであると見做して、私はこれ以上彼らにふれることをやめる。そしてマヌエル・デ・ソウザの身に起こったこと、さらにその妻子の悲運のことに戻る。

マヌエル・デ・ソウザは、王のために略奪され身ぐるみ剥がされた上、その仲間を探しにゆけと言い渡されたが、もはやその頃には彼には金目のものはなく、武器もなく、武器を執りうる配下もないことに改めて気づいた。すでに数日来、頭の具合がおかしくなっていたけれども、この屈辱に反応するだけの気組みは残っていた。さてドナ・レオノールのことであるが、彼女自身、幾多の心労と度重なる窮迫の中に身をおくばかりか、何よりも、夫が自分の眼前で常軌を逸した言動をとり、部下への統率力を失い、そのあげく、わが子を省みるゆとりさえなくしていることに、極度の落胆を覚えずにはいられなかった。このような悲運に突き落とされた繊弱な婦人を、一体誰が、どのようにして思いやればよいのであろう。彼女の頭はしかしまだしっかりとしており、依然自らに従っている男たちの意見を聞いて、ジャングルの間を進み始めた。ただしもはや何の救いもなく何の拠り所もなく、縋るものはただ神のみであった。この時、一行の中にまだピロットのアンドゥレ・ヴァスがいた。コントラメストレもいて、決して彼女を見棄てようとはしなかった。さらにひとりの婦人、ふたりのポルトガル人の女性、数人の女奴隷が一緒であった。このようにして前進を続け、彼らには、先に行ってしまう90人を追跡するのが良かろうと思われた。途中略奪に遭いながらも、2日間にわたって先行する人々の足跡を追いつつ前進を続けた。ドナ・レオノールはもはや非常に弱っており、悲し

みに暮れ意気消沈していた。夫が相変わらずの状態であったし、その上、他の人々とは随分離れてしまったことに気づき、彼らと合流することはもう不可能と見做さざるを得なかったからだ。誠に、彼女のこの心境を思うにつけ、胸の張り裂けるような気持ちに駆られる。とにもかくにも前進を続けると、再びカフル人たちが現われて、またもやマヌエル・デ・ソウザと、その妻と、彼らに従う僅かばかりの供回りの連中に手を掛けた。たちまちその場で、彼らは身ぐるみ剥がされ、いかなる着衣も膚身に残すことを許してはもらえなかった。夫妻はこのような事態に陥っても、いたいけなふたりの子供たちを前にして、主なる神に感謝の言葉を捧げるばかりであった。

巷間伝えられるところによると、ドナ・レオノールは、着衣を脱ぐことには決して応じようとしなかったという。そして平手打ちや拳骨で抵抗しながら我とわが身を守ったという。彼女の様子には鬼気迫るものがあり、もしも他人の前に裸身を曝すくらいなら、カフル人の手にかかって一思いに殺されてしまいたいと思っていた。もしも彼女に向かって、お願いだ、抗わずに服を脱いでくれ、と懇願したのが夫のマヌエル・デ・ソウザでなかったなら、彼女の命は疑いなくそこで終わっていたであろう。マヌエル・デ・ソウザは妻に、誰も生まれてきた時は裸じゃないか、君がそのようになることこそ神の思し召しなのだ、と諭したという。夫妻が嘗めた最大の苦しみのひとつは、年端もゆかぬ息子たちが食を求めて眼前で泣き叫ぶのに、何の手当てもしてやれぬことであった。ドナ・レオノールは裸にさせられると、ただちに地面に身体を投げ出し、たいそう長く伸びていた毛髪でもってわが身を悉く覆ってしまった。彼女は、砂浜に穴を掘り、その中に腰まで入り込んで、もう二度とそこから立ち上がろうとはしなかった。マヌエル・デ・ソウザは彼女の世話役であった老婆のもとへ行き、この老婆がほとんど腐ったようなマントをまだ持っているのを見て、わが妻を覆ってやりたいので、それを貰えぬだろうか、と頼んだ。老婆は差し出した。しかし彼女は、もう二度とかの場所から立ち上がらなかった。穴の中で、裸身のまま突っ伏していた。

誠にもって、この出来事を耳にして、深い哀惜の念と悲しみにとらわれずに済む人がいれば出てきて欲しい。かくも高貴で、身分高き貴族のその娘でありかつ妻でもある人が、これ以上はあるまいと思われるばかりの辛酸を嘗め、それにふさわしい礼儀をもって遇されぬとは。なおも夫妻と行動を共にしている男たちは、マヌエル・デ・ソウザとその妻が着衣を剥がされたのを見て、少し彼らからは距離をとった。自分たちの統率者と、ドナ・レオノールがこのようになりになってしまったことに、眼も当てられぬ思いを禁ずることが出来なかったからだ。やがて彼女はピロットのアンドゥレ・ヴァスに言った。

「私どもの有り様をとくと臉に焼きつけなさい。もはやここを動こうとは思いません。私たちの罪を清算せねばならぬ時が、ついに来ようです。貴方はさっさとここを立ち去り、自分の命を救うための手立てを考えなさい。そして私どもが神の御許に行けるよう祈りなさい。また、貴方がいつの日かインディアなりポルトガルなりに戻れた暁には、わが夫マヌエル・デ・ソウザと私、それに私の息子たちをいかにして見送ったかを語り伝えなさい」と。

夫妻とここまで行動を共にしてきた人々は、もう彼らとしては疲労困憊の統率者を癒すことも、その妻子たちの悲惨と窮乏に救いの手を差し延べることも出来ぬと思い、生きるための糧を求めて、ひとり、またひとりと、辺りのジャングルへ分け入っていった。

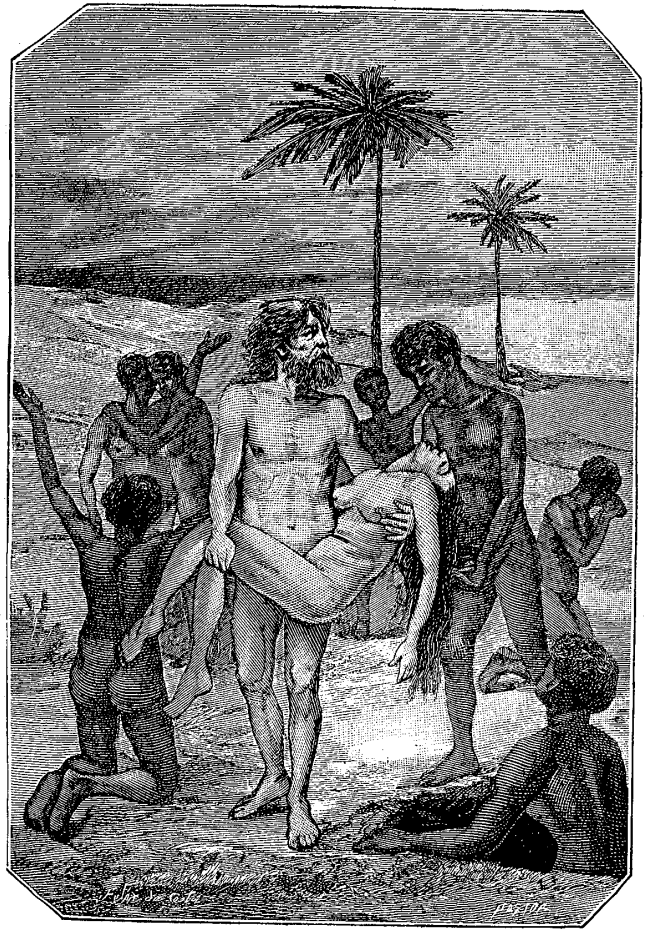
アンドゥレ・ヴァスがマヌエル・デ・ソウザとその妻に別れを告げた後、マヌエル・デ・ソウザと一緒に残留したのは、ガレオン船のコントラメストレのドゥアルテ・フェルナンデスと、数人の女奴隷たちである。彼女らの3名は結局助かり、ゴアに戻ってきて、自分たちが親しく眼にしたドナ・レオノールの死に様について語った。マヌエル・デ・ソウザはすでに正常な判断力を失っていたとはいえ、食を求める妻子たちの困窮ぶりを忘れ果てたわけではなかった。カフル人たちに傷つけられた片

Do Galeão S. João. 35

zey por vos salvar, e encomendaiños a Deos : e se fordes à India, e a Portugal em algum tempo, dizey como nos deixastes a Manoel de Sousa, e a mim com meos filhos. E elles vendo que por sua parte não podiaõ remediar a fadiga de seõ Capitaõ, nem a pobreza, e miseria de sua mulher e filhos, se foraõ por esses matos, buscando remedio de vida.

Dés pois que André Vãs se apartou de Manoel de Sousa e sua mulher, ficou com elle Duarte Fernandes Contra-Mestre do Galeão, e algumas Escravas, das quaes se salváraõ tres, que vierãõ a Goa, que contãraõ como viraõ morrer D. Leonor. E Manoel de Sousa ainda que estava maltratado do miolo, não lhe esquecia a necessidade que sua mulher e filhos passavaõ de comer. E sendo ainda manco de huma ferida que os Cafres lhe cleraõ em huma perna, assim maltratado, se foy ao mato buscar frutas para lhe dar de comer; quando tornou, achou D. Leonor muito fraca, assim de fome, como de chorar, que despois que os Cafres a despiraõ, nunca mais d'alli se ergueo, nem deixou de chorar: e achou hum dos meninos mortos, e por sua mãõ o enterrou na areia. Ao outro dia tornou Manoel de Sousa ao mato a buscar alguma fruta, e quando tornou, achou D. Leonor fallecida, e o outro menino, e sobre ella estavaõ chorando cinco Escravos com grandissimos gritos.

Dizem que elle não fez mais, quando a viu fallecida, que apartar as Escravas d'alli, e assentar-se perto della, com o rosto posto sobre huma mãõ, e ij
por



◀図11 ▲図12

脚の傷がまだ痛んではいたが、苦しみながらも、彼は妻子へ与えるため果実でもあればと思ってジャングルに入った。戻ってみると、ドナ・レオノールは飢えのため、さらには泣き疲れたせいで大変弱っているようであった。カフル人たちが彼女の着衣を剥いでからというもの、彼女は二度とそこから立ち上がりとはせず、泣くのをやめようとしなかった。息子のひとはすでに息絶えていた。彼は手ずから砂浜に息子を埋葬した。翌日マヌエル・デ・ソウザは果物を探しにもう一度ジャングルに入ったが、戻ってみると、今度はドナ・レオノールが事切れていた。もうひとりの息子も同様であった。ドナ・レオノールに覆い被さるように、5人の女奴隷が悲痛な叫び声を上げて泣いていた。

巷間伝えられるところによると、彼は妻が亡くなっているのを確かめると、ただ黙ってそこから女奴隷たちを下がらせ、妻の遺骸の傍に腰を下ろし、半時間ばかり片方の手に顔を突っ伏していたという。涙も流さず何を喋るでもなかった。両眼に気迫を込めて妻の遺骸を凝視する一方、息子のそれには大した関心も払わなかった。こうして暫しの時間が過ぎると立ち上がり、女奴隷たちの助けを借りて砂浜に穴を掘り始めた。そしてずっと口を噤んだまま、妻の埋葬を行ない、その傍らに息子を葬った。このことが済むと、女奴隷たちには何も話しかけず、果物を探しに辿ったのと同じ道を再び辿り始めた。そしてジャングルの中に分け入ったまま、その消息は絶えた。疑いもないことだが、彼は辺りのジャングルをさ迷ったあげく、虎かライオンかの格好の餌食になったであろう。このようにしてマヌエル・デ・ソウザ夫妻は、幾多の苦難に苛まれながらカフル人たちの土地をさ迷うこと6ヵ月の果てに、その一生を閉じた。

この一行と運命を共にしなかった人数は、マヌエル・デ・ソウザが略奪を受けた時にその現場にいた連中と、彼の前方を進んでいた90人とであったけれども、今や、その人数も僅か8人のポルトガル人、14人の奴隷、それにドナ・レオノールが亡くなる時、その傍らに付き添っていた5人の女奴隷の内3人を数えるばかりに減っていた。彼らの顔ぶれの中には、パンタレアン・デ・サ、トゥリスタン・デ・ソウザ、ピロットのアンドゥレ・ヴァス、バルタザール・デ・セケイラ Baltazar de Sequeira、マヌエル・デ・カストゥロ Manuel de Castro と、この物語の語り手であるアルヴァロ・フェルナンデスがいた。この連中は信仰を同じくする者の土地に辿り着くという希望をとうに喪い、この地方をさ迷っていたが、やがてついにかの河の畔で1艘の船に出遭った。その船に乗ってディオゴ・デ・メスキータ Diogo de Mesquita という人物の縁者がひとり象牙の取り引きに来ていたのだ。そこでその人物は、当地で同胞が遭難したという情報を得、部下に命じて彼らを捜索しに行かせた結果、数珠玉との交換によって彼らの身請けを行なうことに成功した。ひとりにつき数珠玉2 ヴィンテン (dois vinténs) 分が必要だったようである。この数珠玉、黒人の間では何にも益して珍重されるものなのだ。もしこの時なおマヌエル・デ・ソウザが存命であったならば、彼もまた身請けされていたであろうが、その死も神の思召しによるものであり、彼の靈魂にとってはあの時家族と共に昇天したことこそより幸いであったように思われる。さて、ここまで生き延びた連中は1553年5月5日モサンビーケに到着した。

パンタレアン・デ・サは長い間カフル人たちの土地をさ迷い歩いた末、飢えや、裸身であったことや、かくも長引いた道中のせいではほとんど体力を使い果たしつつも、ついにかの王様の宮殿へ到達した⁴⁷⁾。宮殿の入口に着くと護衛の兵士に頼んで、王様から何か空腹の足しになるものを貰ってきて欲しい、と言った。彼らはこれを断わって、そのようなものを王様に願い出することは出来ない、と言った。断わる口実として彼らは王様が長い間患っている病気のことを挙げた。この度胸の良いポルトガル人は彼らに、それは一体どんな病気なのだ、と尋ねた。護衛の者はこれに答えて、片方の脚に腫瘍が出来ており、これがたいそう頑固で腐敗も進んでいるものだから、我ら一同はいつ王様に死が来ても不思議ではないと思う、と言った。パンタレアン・デ・サはこの話を注意深く聴き、それではどうか王様に私という人間がやって来たことを知らせて欲しい、と頼んだ。そして自信に満ちた口調で自分は医者であり、おそらくは王様の健康を回復させることが出来ると思う、と語った。護衛の連中は喜び勇んで早速宮殿の中に入り、この一件を王様に知らせた。王様は即刻かの者をここへ連れて参れと言った。パンタレアン・デ・サは王様の腫瘍を見てこう語った。「心配は無用でございます。簡単に治しましょう」と。言っただけで、彼は宮殿を退出した後、図らずも深入りしてしまったこの企てに一体どう対処しようか、と思いついた。もはや生きてここから逃れることは出来ないであろう。そもそも腫瘍を如何に治すかなど、彼は皆目知らないのである。どちらかと言えばこの男は、病を癒して人命を保つよりも、むしろ人命を奪うための学習をより多く積んできた人間である。あれこれ考えを廻らせた末、なるようにしかならぬという覚悟がついに出来たらしく、何遍も死ぬ思いをするくらいなら、一思いに殺されてしまう方がまだましと思いついて、次のような行動に出た。すなわち、地面に小便を放ちそれで僅かばかりの泥を練り、宮殿の内部に入り、その泥をほとんど治る見込みもなさそうな腫瘍の患部に塗ったのである。その日はそれで過ぎた。翌日、さすがに度胸では誰にも負けぬこの男も、この治療が王様の命を救った——そしてそれによって自分の命も救われた——という朗報ではなく、汝を死刑に処すという悲報が届くものと信じつつ、その時を戦々恐々と待っていた。すると護衛の衆がただならぬ喜びの声を上げながら外に現われた。彼らはパンタレアン・デ・サを担ぎ上げたので、どうしてこうも出し抜けに喜んでいるのか、彼はそのわけを尋ねた。彼らが答えて言うには、お前さんの処置してくれたあの薬のお蔭で王様の腫瘍は腐った部分が完全に消え、健康で異常

のない肉が現われてきたのだ、と。この偽医者も宮殿の中に入り、王様の腫瘍の様子を彼らの確言していた通りであることを確かめた。王様が彼に向かい例の薬をもって治療を続けよと申しつけたところ、それでもって僅か数日の内に王様は完全に健康を回復してしまった。このことが一同に知れ渡ると、パンタレアン・デ・サはさまざまな褒美を与えられたばかりか、祭壇に祭り上げられ、王様からまるで神であるかのように礼拝を受けつつ次のように頼まれた。わが宮殿に残りなさい、わが領土の半分を貴殿に進呈するから。そればかりか貴殿の望むものは何であれ施してあげよう、と。パンタレアン・デ・サはこの申し出を断わり、私はもう仲間のもとへ戻らねばなりません、と強い調子で言った。それならと王様は夥しい量の金や輝石を持ってくるよう命じ、彼に多大の褒美を取らせた。併せて部下に命じて彼をモサンビーケまで送り届けるよう言いつけた。

47) 原文は e chegando-se à porta do paço, pediu aos áulicos lhe alcançassem do Rei algum subsidio. 「王様」に当たる rei にも「宮殿」に当たる paço にも定冠詞が付いているので、少なくとも文法的には、前出のカフル人の王のいずれかを指すことになる。内容から判断すると、かつてポルトガル人を厚遇した王様が指示されているのかも知れないが、正確なことは不明。

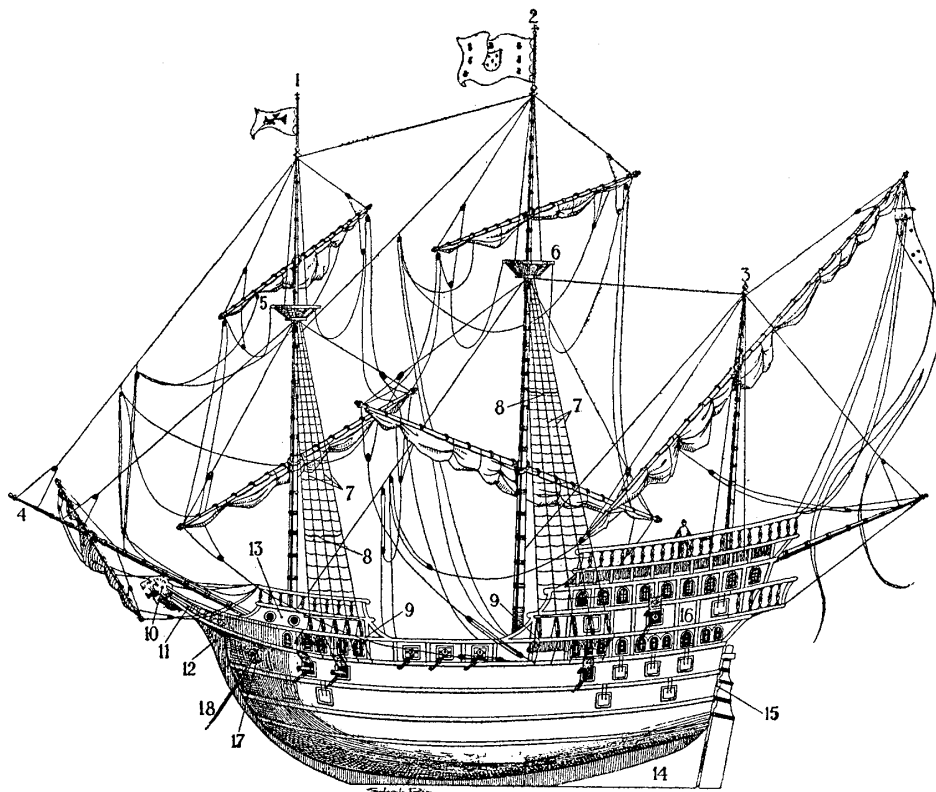


図13

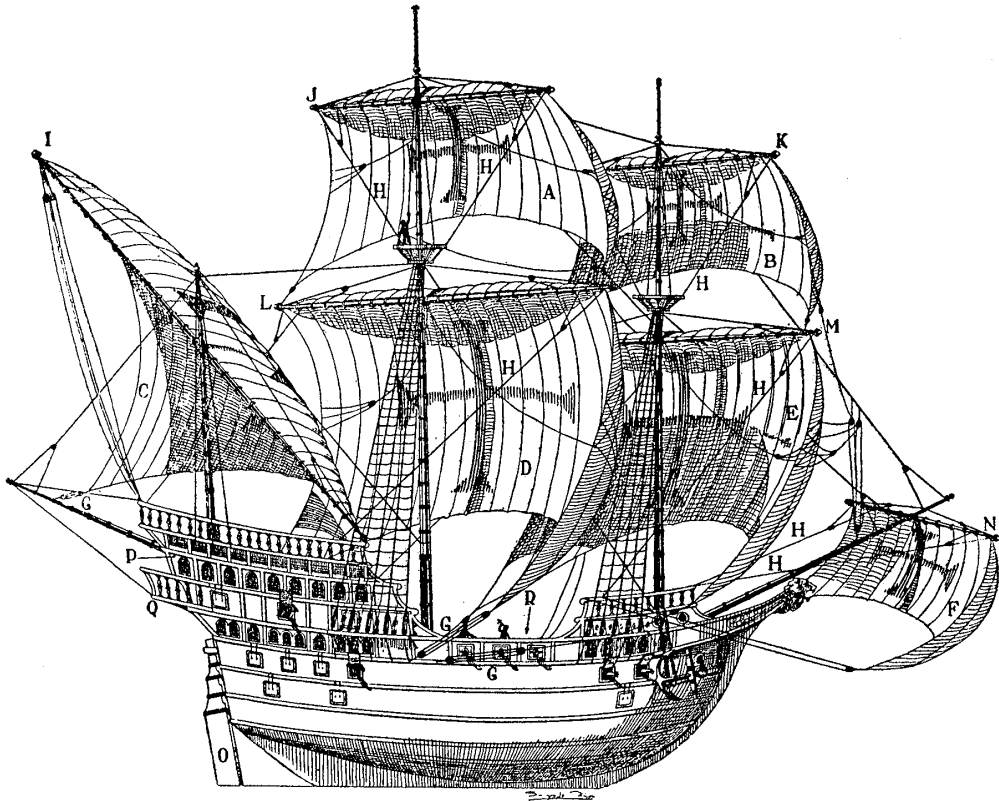
附録 16世紀ポルトガル帆船の船体およびもろもろの帆の呼び名

出典：António Sérgio (ed.), *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito. Anotada, comentada e acompanhada de um estudo por António Sérgio*, I, Lisboa, Editorial Sul, 1955, pp.260-261. 訳語については英語名・日本語名ともに杉浦氏の教示に拠る。

補記：この件、杉浦氏の私信に基づいて記す。帆船用語に関して学会等で定められている専門用語は一切ない。帆船用語は、現在練習船日本丸・海王丸で使われている英語に基づくものが基準になっていると考えてよいが、現代の帆船は昔のそれとはかなり異なるところがある。日本語表記にも無理な点がある。西洋の帆船と日本のいわゆる和船とでは構造も帆装も異なっていたので、和船の用語をそのまま当てはめるのは困難である。



- | | |
|--|---|
| 1 Mastro de proa: フォアマスト (前檣) | 11 Beque: ビークヘッド (衝角船首) |
| 2 Mastro grande: メインマスト (大檣) | 12 Roda de proa: ステム (船首材) |
| 3 Mastro da mesena: ミズンマスト (後檣) | 13 Castelo de proa: フォクスル (フォア・キャッスル) (船首楼) |
| 4 Gurupés: バウスブリット (船首斜檣) | 14 Quilha: キール (龍骨) |
| 5 Gávea do mastro de proa: フォア・トップ (前檣楼) | 15 Cadaste: スターン・ポスト (船尾材) |
| 6 Gávea do mastro grande: メイン・トップ (大檣楼) | 16 Castelo de popa: アフター・キャッスル (船首楼) |
| 7 Ovém: シュラウズ (側方支持索) | 17 Escovém: ホーズ・ホール (錨索孔) |
| 8 Enxárcia: ラットリン (段索) | 18 Amarra: アンカー・ケーブル (錨索) (ホーザー (大索・係留索)) |
| 9 Mesa das enxárcias ou da guarnição: 檣支持索係止索具 | |
| 10 Carranca: フィギュアヘッド (船首像) | |



- | | | | |
|---|---|---|--|
| A | Vela da gávea grande ou traquete da gávea grande:メイン・トップスル(大檣上檣帆) | I | Antena:ミズンヤード(後帆桁) |
| B | Vela da gávea de proa:フォア・トップスル(前檣上檣帆) | J | Verga da vela da gávea grande:メイン・トップスル・ヤード(大檣上檣帆桁) |
| C | Vela da mesena:ミズンスル(後檣帆) | K | Verga da vela da gávea de proa:フォア・トップスル・ヤード(前檣上檣帆桁) |
| D | Vela grande:メインスル(大帆・主帆・大檣大帆) | L | Verga grande:メイン・ヤード(主帆桁) |
| E | Traquete:フォアスル(前帆・前檣大帆) | M | Verga do traquete:フォア・ヤード(前帆桁) |
| F | Cevadeira:スプリットスル(斜檣帆) | N | Verga da cevadeira:スプリットスル・ヤード(斜檣帆桁) |
| G | Escota:シート(帆下隅索・帆脚綱)〔補記:ただし帆脚綱は和船で使う名称で、その使い方がシートとは異なり、また取り付け方や本数も違うので、杉浦氏はこの訳語の妥当性を保留している〕 | O | Leme:ラダー(舵・舵板) |
| H | Braço:ブレース(転桁索) | P | Chapitéu:アッパー・ギャラリー(上部回廊) |
| | | Q | Varanda:クォーター・ギャラリー(船尾回廊) |
| | | R | Convés:デッキ(甲板) |

図版解説および出典一覧

- 図1 ゴメス・デ・ブリト編『海難悲話』初版に収められた「報告」の扉。Sérgio(ed.), *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito. Anotada, comentada e acompanhada de um estudo por António Sérgio*, I, Lisboa, Editorial Sul, 1955 より。
- 図2 ラザロ・ルイスの地図(1563年)に描かれたアフリカ東南部(部分)。アフリカ大陸が左に寝かされた形で描かれているので、左側が北となる。*Atlas de Lázaro Luís 1563. Códice da Academia das Ciências de Lisboa*, eds. Luís de Albuquerque & Maria Catarina Henriques dos Santos, Lisboa, 1990 より。

- 図3 16世紀ポルトガルのガレアン船。考証に基づいて現代の画家が素描したもの。Sérgio(ed.), *op. cit.*より。
- 図4 風浪に翻弄されるサン・ジョアン号。『海難悲話』校訂本(1896年刊)に収められた版画。 *Historia Tragico-Maritima : Descrição chronologica dos naufragios que tiveram as naus de Portugal depois que se poz em exercicio a navegação para a Índia*, ed. Bernardo Gomes de Brito, Lisboa, 1896より。
- 図5 16世紀ポルトガルのナウ船。考証に基づいて現代の画家が素描したもの。Sérgio(ed.), *op. cit.*より。
- 図6 ヴァスコ・ダ・ガマ指揮下の船隊(1502年リスボンを出帆)に属したナウ船。 *Livro de Lisuarte de Abreu*, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1992より。
- 図7 スマトラ島におけるサン・パウロ号の座礁。サン・パウロ号はジョルジェ・デ・ソウザ指揮下の船隊(1560年リスボンを出帆)に属した。 *Livro de Lisuarte de Abreu*, *op. cit.*より。
- 図8 16世紀のソファラ。アントニオ・デ・マリス・カルネイロ著『ポルトガル領インドの諸要塞図』(リスボン国立図書館蔵)所収。António de Mariz Carneiro, *Descrição da Fortaleza de Sofala e das mais da Índia. Reprodução do códice iluminado 149 da Biblioteca Nacional*, ed. Pedro Dias, Lisboa, Fundação Oriente, 1990より。
- 図9 十字架を掲げて前進するマヌエル・デ・ソウザ一行。『海難悲話』校訂本(1896年刊)に収められた版画。 *Historia Tragico-Maritima*, *op. cit.*より。
- 図10 南蛮文化館(大阪)所蔵の「南蛮人渡来図屏風」(16世紀末頃の作品)に現われる黒人。カピタン＝モールに日傘を差し掛け裸足で歩む。遠藤周作編『探訪大航海時代の日本 6 受容と屈折』小学館, 1979年より。
- 図11 ドナ・レオノールの死が描かれる一節。『海難悲話』初版本(1735年刊)より。
- 図12 息絶えた妻を葬るマヌエル・デ・ソウザ。『海難悲話』校訂本(1896年刊)に収められた版画。 *Historia Tragico-Maritima*, *op. cit.*より。
- 図13 16世紀のモサンビーケ〔モザンビーク〕。アントニオ・デ・マリス・カルネイロ著『ポルトガル領インドの諸要塞図』(リスボン国立図書館蔵)所収。Mariz Carneiro, *op. cit.*より。